

第十一回薬学教育改革大学人会議アドバンストワークショップ

「これからの実務実習指導薬剤師養成

ワークショップのあり方について」

報告書

平成 22 年 3 月

平成 11 年に「薬学教育者のためのワークショップ」として始まった“ワークショップ”は、平成 17 年から「実務実習指導薬剤師養成ワークショップ（薬剤師のためのワークショップ）」として全国的に開催されるようになり、それ以降年々開催数が増えて、平成 22 年 3 月までに 317 回に及んだ。この間、薬剤師の受講者は 16,000 人を越え、この結果、実務実習指導薬剤師の認定数は当初の目標であった 10,000 人を大きく上回り、平成 21 年 12 月末の時点で 11,774 人に達している。また、薬系大学の教員もほとんどが本ワークショップを受講しており、平成 22 年 5 月から開始される平成 18 年度入学生を対象とする実務実習については、ワークショップの主題であるカリキュラムプランニングを経験した薬剤師や大学教員による指導体制が整ったと言える。

実務実習指導薬剤師の認定は平成 17 年度から厚生労働省の補助事業として日本薬剤師研修センターが行うこととなり、「薬剤師のためのワークショップ」は実務実習指導薬剤師の認定要件の一つとなった。ワークショップの運営は、同センターのワークショップ実施委員会及び全国 8 地区の代表委員で構成されるワークショップ小委員会が協議・決定された基本方針にしたがって、薬学教育協議会の各地区調整機構が中心となって行ってきた。また指導薬剤師養成事業としての質を担保するために、全国的に統一されたスケジュールや内容でワークショップを実施し、またタスクフォースのスキルアップを目的とする研修会も定期的に行われた。

このような経緯で実施されてきた厚生労働省補助事業としてのワークショップは、平成 21 年度をもって終了する。上記のように初年度の実務実習の実施に必要な指導薬剤師数は確保されたものの、次年度にあたる平成 23 年度、さらには 24 年度に実務実習を受ける学生数は初年度を大きく上回ることが予想されている。また実習施設における指導薬剤師数の異動等による変動を考慮すれば、今後も相当数の指導薬剤師の養成が必要となる。さらに、当初の「薬学教育者のためのワークショップ」は、大学における薬学教育の充実を図る FD 活動の一環として開催されたものであり、「薬剤師のためのワークショップ」においてもその意義は変わらず、教育効果の高い実務実習を提供するための“薬学教育者”、すなわちこれにかかわる薬剤師及び教員の“知識・技能・態度”の向上にあると言える。したがって、実務実習に必要な指導薬剤師の確保のみならず、実務実習のさらなる充実を図り、ひいては社会や学生のニーズに応えることができる 6 年制薬剤師教育を実践するためにも、“ワークショップ”の継続的な実施が望まれるところである。

これを受けて日本薬剤師研修センターは、厚生労働省の補助終了後の平成 22 年度における「薬剤師のためのワークショップ」の実施について、以下のような基本方針を決定している。

- 1) 実務実習指導薬剤師の認定は、これまでどおり日本薬剤師研修センターが行なう。
- 2) センターのワークショップ委員会（仮称）が、各地区から提出された実施計画について協議し、承認する。
- 3) 各地区において、調整機構を中心に、質の担保に十分配慮して、これまでどおりワークショップを実施する（報告書の提出、タスクフォースの人選等）。

一方、平成 23 年度以降の方針は未定であり、早急にその運営・実施体制を整える必要があると考えられる。そこで、日本薬学会薬学教育改革大学人会議 実務実習指導システム作り委員会では「今後の“ワークショップ”のあり方」を、実務実習を円滑に実施するための重要課題と位置づけ、「これからの実務実習指導薬剤師養成ワークショップのあり方について」をテーマに、第十一次アドバンストワークショップを企画した。

本アドバンストワークショップは、薬学教育協議会及び日本薬剤師研修センターとの共催により、平成 22 年 1 月 24 日（日）に慶應大学芝共立キャンパスにおいて開催された。参加者はこれまで各地区で“ワークショップ”の運営・実施にかかわってきたメンバーを中心とし、大学から 24 名、日本薬剤師会の代表として 15 名、日本病院薬剤師会の代表として 15 名が参加し、タスクフォース役を務めた実行委員などを合わせ総数 77 名が本アドバンストワークショップに出席した。

第一部は、まずこれまでの“ワークショップ”の効果を様々な観点から振り返ることを目的に、「認定実務実習指導薬剤師が一施設に一人、全国 1 万人を超えました。さて、ワークショップによって変化したこと、変化しなかったことは？」をテーマに議論を行った。その後、中島宏昭教授（昭和大学医学部）による教育講演により「医療人教育改革においてワークショップが果たす役割」を再認識し、続く第二部の「平成 23 年度以降の実務実習指導薬剤師養成ワークショップの目標を設定し、目標達成に向けたアクションプランを提案しよう」において、“ワークショップ”を継続する必要性をあらためて確認した。さらに第三部「実務実習指導体制を充実し、薬学教育改革を推進するための方策」では、“ワークショップ”のあり方を見直し、さらに発展的かつ効果的に薬学教育の充実に“ワークショップ”を取り入れるための様々な方策が提案された。

ここに本アドバンストワークショップにおける上記のような議論及び成果をまとめることができたので報告する。

平成 22 年 3 月

長野哲雄	日本薬学会薬学教育改革大学人会議座長
望月正隆	薬学教育協議会代表理事
井村伸正	日本薬剤師研修センター理事長
中村明弘	日本薬学会薬学教育改革大学人会議 実務実習指導システム作り委員長
平田収正	第十一次アドバンストワークショップ実行委員長

なお、薬学教育協議会は、本ワークショップ開催にあたり、日本私立薬科大学協会よりご支援いただいたことに感謝の意を表す。

目 次

ページ

全体のまとめ	1
参考資料 1 : ワークショップのプログラム	4
参考資料 2 : ワークショップの参加者および班分け	5
参考資料 3 : 実務実習指導薬剤師養成ワークショップの経緯	6
参考資料 4 : セッション報告	12
第一部「認定実務実習指導薬剤師が一施設に一人、全国 1 万人を 超えました。 さて、 ワークショップによって変化した こと、変化しなかったことは？」	13
作業説明	14
グループ報告	15
第二部「平成 23 年度以降の実務実習指導薬剤師養成ワークショップの目標を設定し、 目標達成に向けたアクションプランを提案しよう」	30
作業説明	31
グループ報告	34
第三部「実務実習指導体制を充実し、薬学教育改革を推進するための方策」	43
作業説明	44
グループ報告	46
参考資料 5 : 中島宏昭教授 教育講演	56

全体のまとめ

第一部は「認定実務実習指導薬剤師が一施設に一人、全国1万人を超えました。さて、ワークショップによって変化したこと、変化しなかったことは？」というテーマで、これまでのワークショップの効果について議論し、整理した。第一部の議論中、参加者からは「これまでのワークショップを評価する必要がある」との指摘があった。6グループから提出された第一部のプロダクトにおいては、「ワークショップによって変化したこと」の中で“価値ある変化”が含まれており、これらは従来のワークショップに対する「評価」に相当する部分である。そこで、第一部のプロダクトのうち、ワークショップのプラスの効果として取り上げられた変化を以下にまとめる。

○ 変化したこと（“価値ある変化”）

1. WSの主旨・方法が理解できた。
2. 大学教員と実務薬剤師の連携の重要性が理解でき、意識の共有ができた。
3. カリキュラムの作成方法とモデル・コアカリキュラムに対する理解
4. 実務実習に対する理解

一方、第一部で「変化しなかったこと」として抽出整理された内容の中には、対応策として今後さらにワークショップの継続を必要とする内容や新たな取り組みが求められるものがあつた。

第二部 「平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成ワークショップの目標を設定し、目標達成に向けたアクションプランを提案しよう」

第二部では、実務実習指導薬剤師養成ワークショップを継続する必要性が確認され、今後継続するワークショップの目標と目標達成に向けたアクションプランが以下のように提案された。

○実務実習指導薬剤師養成ワークショップ継続のニーズ

- ・「教育の質の向上」
質の高い実務実習を継続させ、さらに高めるため
各施設、複数の指導薬剤師による教育指導体制を構築するため
- ・「指導薬剤師の資質向上」
実務実習に係わる全ての薬剤師の資質向上と、実務実習に対するモチベーションを維持していくため
- ・「実習受入施設・指導薬剤師の確保」
指導薬剤師の欠員補充も含め、実務実習受入施設数を維持するため
認定指導薬剤師資格の更新のため
- ・「大学と実習施設の連携」
大学・病院・薬局間で共通の問題意識をもつため
教育に関する専門言語の共有化

○WSの検証

平成22年度のI期終了後には、実務実習指導に関する問題点が出てくることが考えられる。従来の認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップの内容を検証し改善点を明確にするためのアドバンストワークショップを開催する必要性が提案された。そこで、本実行委員会が中心となって平成22年I期終了後にワークショップ（「実務実習指導薬剤師養成ワークショップの形成的評価－円滑な実務実習遂行に対する効果と改善点－」）を企画することとした。

○経費の削減

今後の実務実習指導薬剤師養成ワークショップ開催・参加に要する経費については、今後できるだけ削減し、効率的に実施する工夫が必要であることで意見が一致した。一方、関連省庁からの支援を得るためには、大学と実務薬剤師が連携して6年制薬学教育における実務実習の有用性についてエビデンスが必要であることが指摘された。

○今後のワークショップの企画・運営について

平成23年度以降の指導薬剤師養成ワークショップの企画・運営を実施する組織については、薬学教育協議会が実施の主体となることがアクションプランとして提案された。一方、実務実習指導薬剤師の認定については、平成23年度以降も日本薬剤師研修センターに依頼することで参加者の意見が一致した。

そこで本ワークショップの実行委員会としては、実務実習指導薬剤師養成ワークショップを継続して企画・運営を行う薬学教育協議会内の組織として、実務実習推進委員会、中央調整機構と同レベルで“指導薬剤師養成ワークショップ企画・運営委員会（仮称）”の設置を薬学教育協議会に提案することとした。

「指導薬剤師養成ワークショップ企画・運営委員会」の業務内容

- ・指導薬剤師養成ワークショップのモデル・スケジュール（練習日と当日2日間）の作成
- ・指導薬剤師養成ワークショップの配布資料、プレゼン原稿の作成
- ・各地で開催される指導薬剤師養成ワークショップの質の担保
（チーフタスクフォース、実施スケジュール）
- ・指導薬剤師養成ワークショップの受講資格基準の検討
（注：認定ではなく受講の資格）←意見例：WS受講は実務経験が5年未満でも可としては？
- ・講習会の内容更新の検討
- ・タスクフォースの養成およびスキルアップに関する検討
- ・認定実務実習指導薬剤師を対象としたワークショップに関する検討
（認定実務実習指導薬剤師の資格更新について）

第三部 「実務実習指導体制を充実し、薬学教育改革を推進するための方策」

○ WSの主旨・方法は理解できたが、自らが教育（行動）するまでには至らない。

薬学教育協議会の“指導薬剤師養成ワークショップ企画・運営委員会（仮称）”だけでなく、各地区（調整機構や大学など）が主体となって、実務実習開始後に「実務実習の問題点と対応策」について検討する機会（WSなど）を設けることが提案された。

○ 連携の重要性和意識の共有はできたが、連携の構築への行動をおこすまでには至らない。

各大学が実務実習終了後に、四者（学生、大学教員、病院の指導薬剤師、薬局の指導薬剤師）が参加する報告会、三者（大学教員、病院の指導薬剤師、薬局の指導薬剤師）による検討会などを開催し、実習の点検・評価と改善の機会を積極的に設けることが確認された。また、個々の大学だけでなく、地域単位で実施することも提案された。

○ 受入施設の認定実務実習指導薬剤師とスタッフとの情報共有が困難である。

・実行委員会において、実務実習指導薬剤師養成WSの内容を施設内のスタッフと共有することを制限してきたことが、この問題の原因の一つである可能性が指摘された。まずは、ワークショップの資料や内容を施設内のスタッフと共有することを推奨していく必要がある。そこで、本実行委員会としては、実務実習が本年5月から始まるに際し、今後開催される認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップにおいて必要に応じて下記の内容を参加者に伝えることとした。

- ・認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップの配布資料は、実習施設内においてカリキュラムの教育用語の確認などの目的で有効に活用されることが望ましい。

○薬剤師以外の医療スタッフの6年制薬学教育と実務実習に対する理解が不足している。

実務実習が始まることによって、他の医療職種の理解が進むことが期待できるが、他の医療従事者や国民に対しては下記のプランが提案された。

- ・実習施設内の会議で実務実習の意義について薬剤部長・薬局長が説明と協力の依頼を行う。
- ・ポスターを掲示するなど、国民への広報活動を全国規模で展開する。

興味ある提案としては、チーム医療について協議する目的で、薬学関係者だけでなく医療に関連した多職種が参加する合同ワークショップを開催するという意見があった。

○指導薬剤師養成ワークショップの考え方がまだ大学での教育に反映されていない。

参加者からは各大学でのFD活動の推進や学生による教員評価が提案された。大学教員はほとんど「薬学教育者のためのワークショップ」あるいは「認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ」に参加していることから、本実行委員会では大学教員を主たる対象とした新たなFD活動の必要性を提案することとした。

参考資料 1

第十一回薬学教育改革大学人会議アドバンスワークショップ
「これからの実務実習指導薬剤師養成ワークショップのあり方について」

主 催：日本薬学会

共 催：薬学教育協議会、日本薬剤師研修センター

日 時：平成 22 年 1 月 24 日（日）9：00～17：30

場 所：慶應大学薬学部 芝共立キャンパス（東京都港区芝公園 1-5-30）

参加者：54 名（大学教員 24 名、日本薬剤師会推薦 15 名、日本病院薬剤師会推薦 15 名）

（2P：全体会議、P：チーム別会議、S：小グループ討議）

8：30 2P 受付開始

9：00 2P 開会のあいさつ

9：05 2P 実務実習指導薬剤師養成ワークショップの経緯

第一部 「認定実務実習指導薬剤師が一施設に一人、全国 1 万人を超えました。

さて、ワークショップによって変化したこと、変化しなかったことは？」

9：15 2P 作業説明

9：20 S SGD（KJ 法）

10：50 P プロダクト発表（発表 4 分、総合討論 15 分）

教育講演

11：20 2P 「医療人教育改革においてワークショップが果たす役割」

中島宏昭教授（昭和大学医学部、昭和大学横浜市北部病院呼吸器センター）

12：00 S 昼食

第二部 「平成 23 年度以降の実務実習指導薬剤師養成ワークショップの目標を設定し、目標達成に向けたアクションプランを提案しよう」

12：50 2P 作業説明

13：00 S SGD

14：20 P プロダクト発表（発表 4 分、総合討論 8 分）

14：40 休憩

第三部 「実務実習指導体制を充実し、薬学教育改革を推進するための方策」

14：50 2P 作業説明

15：00 S SGD

16：20 P プロダクト発表（発表 4 分、総合討論 8 分）

16：40 P チームプロダクトのまとめ

17：05 2P チームプロダクトの紹介

17：25 2P 閉会のあいさつ

ワークショップ参加者および班分け

I チーム

A班	
東京理科大学	上村 直樹
名城大学	大津 史子
大阪大谷大学	小山 豊
広島大学	小澤 孝一郎
日本薬剤師会	金田一 成子
日本薬剤師会	近藤 直緒美
日本薬剤師会	神田 晴生
日本病院薬剤師会	土屋 節夫
日本病院薬剤師会	矢野 裕章

タスクフォース: 阿部、平田

B班	
明治薬科大学	阿刀田 英子
岐阜薬科大学	土屋 照雄
近畿大学	伊藤 栄次
徳島文理大学香川	加藤 善久
日本薬剤師会	花島 邦彦
日本薬剤師会	大原 整
日本薬剤師会	三浦 公則
日本病院薬剤師会	木平 健治
日本病院薬剤師会	保科 滋明

タスクフォース: 賀川、中村

C班	
東北薬科大学	林 貴史
日本薬科大学	佐藤 卓美
神戸学院大学	徳山 尚吾
崇城大学	宮本 秀一
日本薬剤師会	田口 勝英
日本薬剤師会	野田 雄二
日本病院薬剤師会	宮本 篤
日本病院薬剤師会	村田 和也
日本病院薬剤師会	甲斐 純子

タスクフォース: 小佐野、戸田

II チーム

A班	
北海道薬科大学	市原 和夫
城西国際大学	児玉 備夫
東京薬科大学	大野 尚仁
京都大学	山下 富義
日本薬剤師会	永野 康己
日本薬剤師会	榊原 明美
日本病院薬剤師会	下堂園 権洋
日本病院薬剤師会	西尾 浩次
日本病院薬剤師会	木村 康浩

タスクフォース: 入江、戸部

B班	
慶應義塾大学	木津 純子
名古屋市立大学	鈴木 匡
摂南大学	河野 武幸
第一薬科大学	村山 恵子
日本薬剤師会	曾根 清和
日本薬剤師会	出石 啓治
日本病院薬剤師会	山田 英俊
日本病院薬剤師会	幸田 幸直
日本病院薬剤師会	横田 学

タスクフォース: 尾島、吉富

C班	
新潟薬科大学	中村 辰之介
金沢大学	石崎 純子
福山大学	佐藤 英治
九州保健福祉大学	比佐 博彰
日本薬剤師会	永田 泰造
日本薬剤師会	桂 正俊
日本薬剤師会	山本 晃之
日本病院薬剤師会	白井 裕二
日本病院薬剤師会	荻内 徳蔵

タスクフォース: 高橋、原

主 催	
日本薬学会会頭	松木 則夫
薬学教育改革大学人会幹事長	長野 哲雄

共 催	
薬学教育協議会	望月 正隆
日本薬剤師研修センター	井村 伸正

講 師	
昭和大学横浜市北部病院	中島 宏昭

タスクフォース	
慶應義塾大学	阿部 芳廣
熊本大学	入江 徹美
北里大学病院	尾島 勝也
静岡県立大学	賀川 義之
帝京大学	小佐野 博史
佐野薬局	高橋 寛
昭和薬科大学	戸田 潤
昭和大学	戸部 敬
昭和大学	中村 明弘
東京薬科大学	原 博
大阪大学	平田 収正
福山大学	吉富 博則

オブザーバー	
薬学教育協議会	須田 晃治
日本薬剤師研修センター	久保 鈴子
日本薬剤師会	森 昌平

行 政	
文部科学省	吉田 博之
	川村 優
厚生労働省	近藤 恵美子

事 務 局	
日本薬学会	土肥 三央子
	厚見 純子

参考資料 3

「実務実習指導薬剤師養成ワークショップ の経緯」

戸部 徹

(昭和大学薬学部教授)

「薬学教育者のためのWS」
から
「認定実務実習指導薬剤師養成WS」
に至る経緯

薬学における
初めてのWS
第1回 昭和大学
「薬学教育者のためのワークショップ」
平成11年12月24・25日
於:昭和大学7号館
運営:教育委員会



ワークショップの趣旨(抜粋)
教育とは
「教師が事実であると信じていることを学習者に話し伝えること」と
考えられてはいないでしょうか。
.
.
このワークショップでは、教育を「学習者の行動(知識・技能・態度)に
価値ある変化をもたらすこと」と捉えています。
学習者の到達すべき目標を設定し、
教える側全員がこの目標を理解した上で、
教育の方法、評価法を具体的に作りあげ、
学習者が目標に到達したか、
この教育の方法そのものが妥当であるかなどを評価し、
より良いカリキュラムを作りあげていく手法を体得することが必要です。
そしてそれがこのワークショップの目的なのです。

第1回 昭和大学
「薬学教育者のためのワークショップ」参加者
1P3S(21名)



中島宏昭先生 工藤一郎先生

平成11年12月24～25日

薬学教育のカリキュラムをつくろう!

- ・ 科学の進歩に合った学生、社会の要求を満たす学生の育成
- ・ 年限延長問題の議論の過程で、必要に迫られた。
- ・ 知識偏重教育ではなく、技能、態度もバランスよく教育する。

←医学教育改革の動き

by I. Kudo

第2回 昭和大学
薬学教育者のためのワークショップ
平成12年9月
運営:ワークショップ小委員会

第1回 私立薬科大学協会
「薬剤師養成カリキュラム作成に関するワークショップ」
平成13年1月
運営:薬剤師養成カリキュラム検討委員会

第1回 薬学会・薬学教育協議会
「全国薬学教育者のためのワークショップ」
平成13年7月
運営:薬学教育者ワークショップ・FD推進委員会

薬剤師さんが正式参加

平成15年9月
共立薬科大学・昭和大学・東京薬科大学共催

「薬学教育者のためのWS」

第1回「薬剤師のためのWS in 長野」

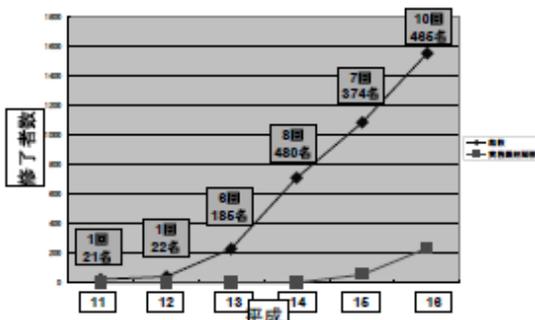
平成16年10月

ワークショップの趣旨

今回は、薬学教育者WSの手法をもとに、全国で初めて実務薬剤師だけを対象に開催しました。

.....このWSで体感、体得した手法を参加者各々のエリアで、様々な方法で試行されることを望んでいます。なぜなら、初めての「実務薬剤師のためのWS」であり、参加者は開拓者なのだから

薬学教育者ワークショップ受講者数の推移



by I. Kudo

薬学教育者ワークショップ受講者数の推移

平成16年度末までに
33回のWSで
約1500名の教員と
200名の実務薬剤師が受講

薬学教育者ワークショップ受講者数の推移

平成16年度までは
原則として大学あるいは大学共催、
薬学会主催のWSであった。
この時点までは認定と関係なく
実務薬剤師が参加していた。

実習生指導薬剤師(4年制)から 認定実務実習指導薬剤師(6年制)へ

> テキスト講習による指導者養成(知っていれば良い)

協議目的

> 実習モデル・コアカリを理解し、行動が変化した

指導者養成を目指して、必要な学習内容は？

ワークショップの必要性の可否を1期生・2期生で協議
(平成16年度:日本薬剤師会にて)

アイウエオ講習会とWSへの参加を条件とする
指導薬剤師実務実習実施講習会経費補助の申請(厚労省)

薬学教育者のためのWSから
指導薬剤師養成のためのWSへ(17年度:工藤先生の英断)

by T. Nagata

ワークショップ

教育理念に対する理解を深めるため
全国薬学教育者ワークショップの例を参考に
ワークショップを実施する。
また、薬学教育の一環として
実務実習が行われるので
認定実務実習指導薬剤師には
学生の習熟度を適切に
評価する方法についても
理解を深める必要がある。

平成17年3月25日 実務実習指導薬剤師養成研修検討委員会報告

認定実務実習指導薬剤師 の認定要件について

認定実務実習指導薬剤師については、

- ・ 基本的素養を有する者であることを確認のうえ、
- ・ 実務経験及び勤務状況等について所定の研修応募要件を満たし、
- ・ かつ、認定要件として、ワークショップ形式及び講習会形式の研修を受講することが求められている。

日本薬剤師研修センターHPより

平成17年度から

日本薬剤師研修センターによる 実務実習指導薬剤師 の 認定

日本薬剤師研修センター

WS実施委員会



WS小委員会

日本薬剤師会、日本病院薬剤師会
日本薬剤師研修センター、薬学会(薬学協議会)

当初は10名程度の委員会

・WSの開催承認、質の担保、補助金の配分

WS開催希望数増加に伴い、各地区調整機構から委員の参加

WSの承認(補助金の配分なども含む)

質の担保:調整機構が担保する形になってきた

認定実務実習指導薬剤師

6年制 長期実務実習の充実に向けて

平成17年度～

認定実務実習指導薬剤師養成
7,000人を目指して

認定実務実習指導薬剤師養成
10,000人を目指して

WSの構成最小基本単位

参加者:9名 x 3 = 27名:P

薬局薬剤師:病院薬剤師:大学教員

1:1:1

薬局薬剤師:病院薬剤師:大学教員

6:2:1

タスクフォース:9名以上

ディレクター:1名以上

コンサルタント:1名

事務方:数名

WSプログラムの解剖

(オリエンテーション (教育とは))

ゲーム
KJ法
目標
方略
情報交換会

評価
対応
医療人教育の講演
(10000人の養成を目指して)

6年制実務実習の理解のために

by Y. Abe

**医療現場と大学が
一体となって薬学生を育てる。**

実務実習指導薬剤師と大学教員が
共通認識を持つことを目的に、
WSを通してカリキュラム作成の
過程を体験し、
薬学教育を共に考える機会と捉えている。

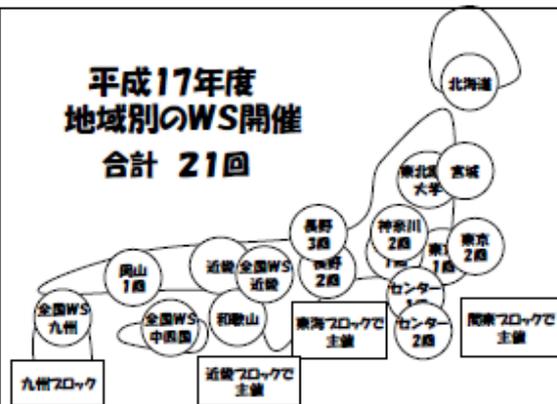
by I. Kudo

第1回 日本薬剤師研修センター

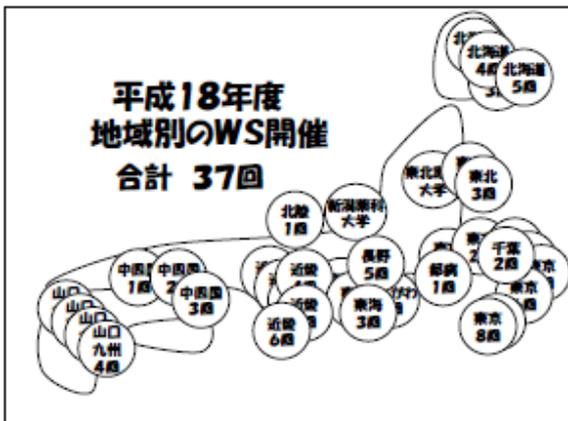
「認定実務実習指導薬剤師養成WS」

平成17年6月

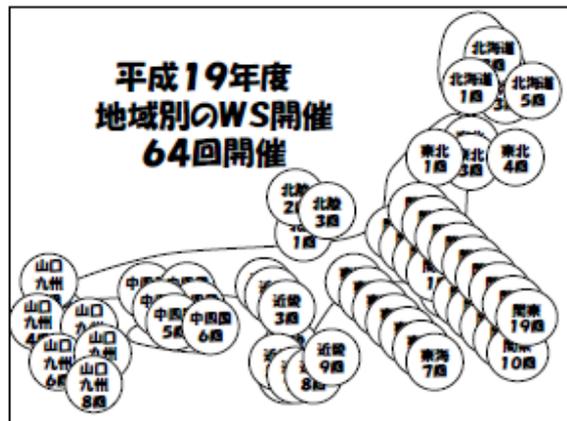
平成17年度
地域別のWS開催
合計 21回

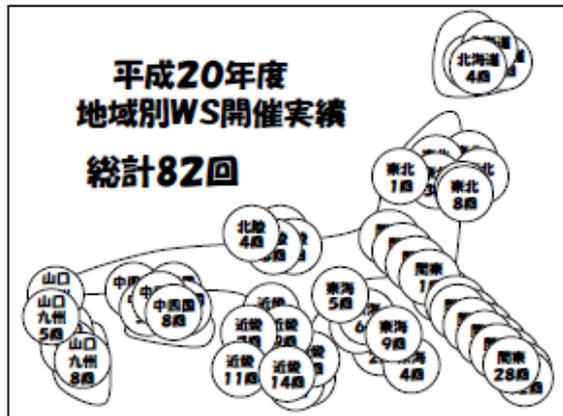


平成18年度
地域別のWS開催
合計 37回



平成19年度
地域別のWS開催
64回開催





平成22年1月23日までに
314回のワークショップ開催
今年度残りのWSは3つ

WS受講薬剤師数 と 認定指導薬剤師登録数

	薬局	病院	合計
WS受講者 (2009・12・31)	11,215	5,035	16,250
認定登録者 (2009・12・31)	7,949	3,825	11,774

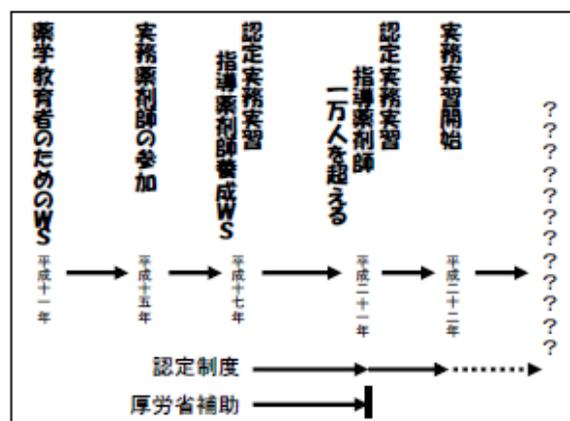
認定実務実習指導薬剤師

登録された
認定実務実習指導薬剤師は
10,000人を超えたが
.....

平成22年度の運営方針

- ・実務実習指導薬剤師の認定は、これまでどおり、日本薬剤師研修センターが行なう。
- ・研修センターのワークショップ運営委員会が、各地区から提出された実施計画について協議し、承認する。(前期計画についてはすでに承認)
- ・各地区において、調整機構を中心に、質の担保に十分配慮して、これまでどおりワークショップを実施する。
(報告書の提出、タスクフォースの人選等)
- ・平成23年度以降のワークショップについては、未定。

by K. Hirata



参考資料 4

セッション報告

第一部

「認定実務実習指導薬剤師が一施設に一人、
全国1万人を超えました。 さて、ワーク
ショップによって変化したこと、変化しな
かったことは？」

第一部 作業説明

第一部

認定実務実習指導薬剤師が一施設に一人、
全国1万人を超えました。
さて、このワークショップによって変化したこと、
変化しなかったことは？

- ・平成21年度までのワークショップを振り返ってみましょう。
- ・カードに書いて抽出してみよう。

平成21年度までのワークショップを
振り返ってみましょう。

例えば、

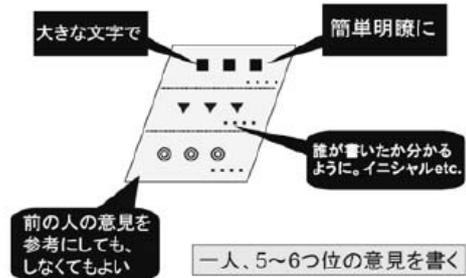
- ・個人では？
- ・組織では？
- ・地域、全国レベルでは？

ワークショップによって変化したこと、
変化しなかったことは？

模造紙で整理してみましょう。

- カードに記入する。
 - ・ まず変化したこと
 - ・ 次に変化しなかったこと
- 島をつくる。
- 名札をつけて図式化する。

記載上の注意点



作業

- 作業時間 90分
- フロダクト/模造紙で
- 集合時間/10:50
- 発表/各グループ4分、総合討論15分
- 司会進行係、記録係、発表者を決めてから作業を始めて下さい。
- さらに、報告書担当者も決めて下さい。

第11回アドバンスワークショップ報告
第一部

I-A 報告者：名城大学 大津史子

第一部「認定実務実習指導薬剤師が一施設に一人、全国一万人を越えました。さて、ワークショップによって変化したこと、変化しなかったことは？」

標記のテーマについて、KJ法で問題点の洗い出しと、整理を行った。
プロダクトの写真を下記に示す。



議論の過程において、以下の3つのポイントが論点の中心となった。

- ①「教育」の手法についての理解
- ②「教育」に対する意識の変化
- ③「教育」に対する意識の共有

この3つのポイントについて、ワークショップを繰り返すことで、変化が見られ良い方向へ大きく動いたという意見がある一方、まだまだ足りないことから現状が全く動いていないという意見も出て、ワークショップの評価の良し悪しは、参加者の環境に大きく依存していることがわかった。

①「教育」の手法についての理解

プラスの変化としては、目標を立てて教育することの意義がわかると内容もバージョンアップしたという意見や、大学の講義に PBL が増えたなど、実際の教育現場での変化が着実に現れている事がわかった。また、地域で WS 形式の研修会を開催できるようになったという意見もあり、教育現場だけに留まらず、社会の中へのプラスの変化が起こっている事例があることもわかった。

しかし、一方で、教育現場におけるこれらのプラスの変化は、一部の教員に留まっており、大学全体には全く波及していないという意見も多く、大学教育全体としてみた場合は、そのプラスの変化の变化量は、小さいと考えられた。

また、社会への波及効果としても、タスクフォースの経験のある者はある程度、活用できるところまで変化しているが、たった1回のWS参加だけではしばらくすると熱もさめ、モチベーションも下がってしまうという意見や、そもそも1回の参加では、全てを理解できないのではという意見もあった。

②「教育」に対する意識の変化

意識のプラスの変化としては、まず、教員の教育というものに対する意識は間違いなく変わったと思われる。また、薬剤師間の連帯感が生じ、他施設・大学とのコミュニケーションがとれるようになった。大学・病院・薬局の人脈がふえたという意見が多かった。しかし、これも、「以前よりは」進歩したというレベルであり、薬-薬連携、大学との連携がめざましく進歩したという所までは行かなかったというのが実際の印象であった。

③「教育」に対する意識の共有

ワークショップを通して、「教育」が共通言語となったため、連携して取り組まなければならないという共通の認識はできた。また、これまでにあまり共通の話題で長時間議論することのなかった薬局病院、大学にいる薬剤師が「教育」という共通の話題で、長時間同じ意識を持つことができたことは、プラットフォームの構築という面では、大いに役だったという感覚は、参加者に共通していた。

この3つのポイントの整理で、これらの問題点から派生している、もしくは、反対にこれらの問題点のベースになっている可能性もある問題点を、以下のように整理した。

④社会の認知度

薬学6年制教育の意図が社会にアピールできていない。これは、WSでは変えられない問題であるが、取り組むべき問題ではないか。

⑤薬剤師自身の理解

WSに参加していない薬剤師の意識（大多数）を変えるところまでは言っていない。教育を単なる「負担」としかとらえ切れていない薬剤師も多い。

⑥薬剤師以外の理解

病院・薬局で、薬剤師以外のスタッフの意識に変化をもたらすことはできていない。特に、病院の上層部や、大学の基礎の研究者の意識は、ほとんど変化していない。

⑦自己中心

WSが点数や資格をとるための手段にしかになっていない薬剤師が多い。

⑧WSの内容

WSの内容を秘密にすることが、もっと広げていくための足かせになっていた可能性はないか。

以上の議論を踏まえ、「ワークショップによって変化したこと、変化しなかったこと」を、以下の様に整理した。

1. WSの主旨・方法は理解できたが、自らが教育（行動）するまでには至らなかった（フォロー・アップがない）。
2. 連携の重要性は理解できたが、実際に行動（継続）するまでには至らなかった。
3. 意識の共有はできたが、実際に行動（継続）するまでには至らなかった。
4. WSの参加者とWSの非参加者の溝がある。
5. 薬剤師と他職種の壁がくずれていない。

教育とは、「学習者の行動に価値ある変化をもたらすプロセス」とすると、ワークショップは、「変化」の第一歩である、「理解」をさせることには大いに貢献したが、「行動」に移すまでに至るほどのモチベーションを与えるには、不十分であったのではないかと結論づけられた。

第 11 回アドバンスワークショップ報告書

I チーム B 班

阿刀田英子、伊藤栄次、大原 整、加藤善久、木平健治、土屋照雄、
花島邦彦、保科滋明、三浦公則
タスクフォース：賀川義之、中村明弘

「第一部」

『ワークショップによって変化したこと、変化しなかったこと』

課題に従い K J 法により、ランダムに各自の思うところを書き出し、その後整理する段階で議論した。その結果、カードの内容を①WS そのものに対する理解の変化、②モデルコアカリキュラムに対する理解の変化、③実務実習（教育）に対する理解の変化、④大学・病院・薬局の相互理解の変化、⑤実務実習に対する熱意の変化、⑥組織の連携の変化、⑦受け入れ対応の変化、⑧その他に分類された。そして、それぞれの変化を「(+) 望ましい変化」と「(-) 望ましくない変化または変化しなかったこと」に分けて示した。

深い内容のカードが多くあったが、時間が足りず 1 つ 1 つの内容について十分に議論することが出来なかったことと、プロダクツのイメージをどのようなものにするかということに議論が集中したため、記入者の意図を真に反映した分類となったか不安な部分もある。

* (+) の変化：望ましい変化があった項目

(-) の変化：変化がなかった、または、望ましくない変化があった項目

1 WS そのものに対する理解

(+) の変化：・ WS に対する理解が深まった。

(-) の変化：・ 一部の人に WS に対する偏見が見られる。
・ 実務実習における WS の位置づけが理解されない。
・ 個人により WS への参加意識に差がある。

2 モデルコアカリキュラムに対する理解

(+) の変化：・ コアカリへの一定の理解が得られた。

・ コアカリが理解できるようになった。

(-) の変化：・ まだコアカリを知らない薬剤師がいる。

・ 実務実習で、どこまで教えたらいいか分からない。
・ コアカリは分かるが、具体的にどう教えたらいいか分からない。
・ コアカリの理解にバラつきがある
・ コアカリの運用の仕方、実際のやり方がわからない。

3 実務実習（教育）に対する理解

(+) の変化：・ 教育に対して共通の認識ができた。

・ 教育というものがなんとなく分かった。
・ 教育の意味が理解できた。
・ 形成的評価等の用語が定着した。
・ シラバスの書き方が改善された。
・ 講義内容を考え直す習慣が身についた。

(-) の変化：・ 教育に興味が無い。

・ WS で見えてきた問題点が大学内で共有されていない。
・ 末端の薬剤師の教育に対する認識が低い。

4 大学・病院・薬局の相互理解

- (+) の変化：
 - ・大学の教員といろいろな話ができる。
 - ・現場の薬剤師と大学教員とのコンタクトが多くなった。
 - ・大学教員に対する思いが良くなった。
- (-) の変化：なし

5 実務実習に対する熱意

- (+) の変化：
 - ・学生受入の心構えができた。(薬剤師、大学教員ともに)
 - ・事前実習に参加する薬剤師が増えた。
 - ・薬剤師の教育に対する熱意が高くなった。
 - ・実習に対する責任感ができた。
 - ・実習を受けるという意識付けができた。
- (-) の変化：
 - ・考え方の硬い人は何も変わらない。
 - ・古い時代にWSを受けた大学教員の意識が変わっていない。
 - ・コアカリの実施にどのように関わるか理解できない。
 - ・病院薬剤師の意識が変わっていない。
 - ・教員によっては変化なし。

6 組織の連携

- (+) の変化：
 - ・薬学教育において大学間の横のつながりができた。
 - ・大学と実習現場との考え方の違いが明確になり、問題点が見えてきた。
 - ・大学教員と現場の薬剤師が同じ方向を向いてきた。
 - ・地域の連携が深まった。
- (-) の変化：
 - ・大学、病院、薬局の見えない溝は依然としてある。
 - ・組織のトップの意識が変わらない。(学長・学部長、病院長、薬剤師会長)

7 受け入れ対応

- (+) の変化：
 - ・参加型実習の考え方が浸透した。
 - ・実習受入への具体的対応ができた。
 - ・各県が受け入れ体制の整備に取り組んだ。
- (-) の変化：
 - ・学生受入への不安。(ある程度理解はしているが)
 - ・薬局薬剤師の医療に対する意識。

8 その他

- (+) の変化：
 - ・薬局の現状が明らかになった。
 - ・WSの手法を他の分野で使用できるようになった。
 - ・薬剤師会の会議の方法が変わった。
 - ・薬剤師会の組織・団体としてWSを取り入れた研修会を開催。
- (-) の変化：
 - ・資格取得が目的になっている。
 - ・認定というライセンスが一人歩きしている。
 - ・実習生の来ない施設のモチベーションが下がる。

第1部 「認定実務実習指導薬剤師が一施設に1万人を超えました。さて、ワークショップによって変化したこと、変化しなかったことは？」の報告書

10班 野田 雄二

KJ法によって各人が5~6枚の“ワークショップによって変化したこと、変化しなかったこと”を書き出した。島に分けて10班ではツリータイプに関連付けをした。

島のタイトルとその主な内容は（良い変化◎ 今後の課題△）

- ◎連携の深まり
 - ・ 大学関係者との距離が近くなった。
 - ・ 大学、日薬、病薬の間で共通認識が生じた。
 - ・ 顔見知りが増えた。
 - ・ 実習に対する意識の共有ができた。
 - ・ 薬剤師と大学教員との連帯感が芽生えた。
- ◎意識の変化
 - ・ 実習への意識が高まった。
 - ・ 実務実習に対するモチベーション、認識が高まった。
 - ・ 長期実務実習に対する関心が深まった。
 - ・ 薬剤師会会員が教育について感心を持った。
- ◎研修方法の変化
 - ・ 研修会の方法が講義形式から変わった。
 - ・ KJ法やSGDが盛んに行われる様になった。
 - ・ 発言する参加者が増えた。
- ◎カリキュラム作成方法
 - ・ GIO、LS、SBOなど言葉の認知度が上がった。
 - ・ カリキュラム作成能力が高まった。
 - ・ 実習実習を立体的に考えられる様になった。
 - ・ カリキュラム、シラバスの作成が容易になった。
- ◎カリキュラムの理解
 - ・ コアカリキュラムのSBOs、LSについて理解されてきた。
 - ・ 学生が大学で何を学んでいるか知ることができた。
 - ・ それぞれの職域における仕事の内容を知ることができた。
 - ・ 学生に教える姿勢が分かった。

これらを木の実（リンゴ）に例えて配置した。

- △意識の未変化
 - ・ 今だワークショップの意味が理解されていない。
 - ・ 実務実習に関わらない方々の無関心。
 - ・ ワorkshopに参加していない方々のスキル。

△自習指導に対する不安

- ・ 中小病院や診療所における不安が解消されていない。
- ・ 各施設で実習のスケジュールができていない。
- ・ いざ指導できるか不安が残っている。
- ・ 実習項目がどのLSに該当しているか難しい。

- ・ 評価の基準が示されていない。
- ・ 実習内容がどれだけ実践に移るか疑問。

△ その他

- ・ 大学関係者の中で実務に関係の無い方々の無関心。
- ・ 臨床教員だけの仕事だと一部考えられている。
- ・ ワークショップのあり方に疑問のある方がいる。
- ・ ワークショップに参加後変化した意識が元に戻る。
- ・ 指導薬剤師間での連携が不足している。

これらが“虫”“痛んだリンゴ”“枯葉”などに例えて配置した。

そもそも地面に、根っこにある考えとして

- ・ 組織のトップがワークショップに参加しないと変化しない。
- ・ 薬剤師に教育に関するモチベーションが不足している。
- ・ 薬剤師の将来に対する展望が描けていない。
- ・ 受け入れ薬局以外の6年制に対する理解が低い。
- ・ 実務実習の現場に与える影響について意識がない。
- ・ 社会における認知度が低い。

10 班のメンバーは大学 4 名、薬局 2 名、病院 3 名で、この KJ 法のタックシールの内容に各人がかなり思いいれ？があり白熱した議論になった。ワークショップの参加が実務実習指導薬剤師の認定要件であるが、そのことだけでなくコアカリキュラムがどの様に作成されたか、教育とは“価値有る変化をもたらす事である”を体験することで学生の参加型実習に対する理解が深まったという意見が多かった。

第 11 回薬学教育大学人会議アドバンストワークショップが、23 年以降のワークショップのあり方、目標、具体的なプランといった内容で、時間も議論がすぐに白熱し足りなくなる傾向であった。各班の内容をもとに検討されると思うが、実務実習指導薬剤師の育成のみならず将来の“薬剤師像”を描いた又、大学、薬局、病院各々が協力してそれらに向かって行動できるプランであって欲しいと思います。

第11回薬学教育改革大学人会議アドバンスワークショップ 第一部 報告書
課題：「認定実務実習指導薬剤師が1施設に一人、全国1万人を超えました。さて、ワークショップによって変化したこと、変化しなかったことは？」

II チームA班 大野 尚仁 (東京薬科大学)

最終プロダクト

WSの現状分析と今後の課題

【変化したこと】

【変化しなかったこと】

薬剤師教育に対する意識が高まった

大学組織としてのモチベーションが低い
大学でのモチベーションが低い(教育について)
医療現場の意識が低い
受け入れ側の意欲・意義・認識が低い

連携の重要性が明確になった
様々な面で連携が始まった

様々な面で連携が足りない

教育技法の理解が深まった

教育技法の理解が足りない

WSの教育技法を応用できた

WSの教育技法が活用できていない

WSの評価ができていない
WSの質を向上させる必要がある
WSの広報システムが未発達である(WS数が不足している)

* 島の名札の一覧と関連性を対比して示した。

(明朝体は「変化したこと」ゴシック体は「変化しなかったこと」)

議論の経緯

第一部では「認定実務実習指導薬剤師が1施設に一人、全国1万人を超えました。さて、ワークショップによって変化したこと、変化しなかったことは？」を課題として、KJ法を用いて各人の思うところをカードに記載し、情報を抽出・整理した。討議は下記に示したように進められた。感想も含めて記載する。

1. 作業を始めるにあたり、変化したことを記載することはイメージできるが、変化しなかったことを書くのは、なかなか難しい、という発言があった。全員が同じように感じており、「変化させなければならぬこと、不十分なこと、あるいは、今後の課題」も含めて記載すれば良いであろうと解釈し、カードに記載を始めた。「変化しなかった」という意図を正確に抽出できたかどうか疑問はあるが、本WSの主題である「23年度以降はどうする？」に対しては、適切に情報が抽出・整理できた。最終プロダクトのタイトルもおのずと「今後の課題」を含める形となった。合同討議にて他のグループのまとめを拝見しても、情報整理の方向性は類似していたので、一安心した。

2. 情報の抽出については、まず「変化したこと」を書き出し、ついで「変化しなかったこと」についておこなった。情報の整理についても、「変化したこと」について模造紙に展開し、島づくりを行なったのちに、「変化しなかったこと」についても繰り返した。さらに、関連をつける段階で島全体の位置関係を観点ごとに集約した。

3. 島は、「意識」「連携」「教育技法」「評価」という4つの観点に集約され、それぞれに変化したこと、しなかったことがあげられた。ただし、「評価」については、変化しなかったことのみがあげられた。

4. 「意識」については、WSの主旨説明で提示されたように、1万人を越える数の指導薬剤師を養成できたことは大きな変化であり、本グループの島においても「意識の高まり」として整理された。一方で、未登録者の数の多さは、意識が十分に高まっていない（変わっていない）ことを示す重要な数値であると捉えた。このことと同様に、大学側の組織として、あるいは個人としてのモチベーションが低いことがあげられた。医療現場側についても、組織、個人としての問題があげられた。これらの点は更なる努力が求められていることを示すものである。

5. 「連携」についても様々な面で著しい変化が起こったことがわかった。「変化しなかったこと」のカードを眺めてみると、ギャップ、十分とはいえない、依然として、氷山の一角などの表現が見受けられ、明確な抵抗勢力として示されているものではないものと思われる。むしろ、「兆し」は見えるが十分ではないという高い目標設定の現れであると捉えることができる。我々が国民から求められていることは、単なる「兆し」「気づき」では済まされるものではないことを良く反映した結果といえる。

6. 「教育技法」は「応用できる」レベルを期待したが、それには至っていないというのが全体の印象である。変化は確実に始まり、レベルの向上は認められているが、不十分なのである。レベルの向上の度合いをどのように捉えるかについても、個々に異なる感覚であり、「教授錯覚」が多分に含まれている可能性がある。実践するためには、フォローアップなど他の様々な方策を盛り込む必要があるという結論が導かれた。これらの点については、第二部・第三部にて、詳細に議論されたので、そちらの報告書に譲りたい。

7. 「評価」は厳しいカードが並んだ。そもそも評価したことが無い、学生指導は始まっていないのだからフィードバックを受けるチャンスが無い、などのこともあり、WSそのものの評価方法を考案することは重要なテーマとしてあげられた。本日の参加者たちは、タスクフォースとして、会場校の窓口として、あるいは事務局の中心となってWSに長期間を費やしてきたメンバーが多い。質の担保、テーマ、チーフタスクの資格、会場の設定、コンサルタントなど、多くの点について考えなければならないという気持ちが表れている。

8. 今回のプロダクトは第二部・第三部の実施にあたり、十分に整理された情報として用いることができた。ただし、さまざまな点で、定量的に解釈する段階には至っていないので、その点は留意しなければならない。

9. 冒頭に示した通り「変化しなかったこと」を、変化させなければならないこと、今後の課題と解釈して抽出・整理した。これで良かったと思うが、KJ法の課題に対して正確に応えたかどうかについて疑問が残る。振り返ってみれば「ワークショップによって」との条件付きで作業をしたつもりであるが、自ずと「6年制長期実務実習の取り組み全体」に対象を広げて考えたように思われる。長期実務実習の充実のために行われている取り組みであるから、当然である。グループメンバーの多くは、複数の組織・委員会等で活躍しておられる方々であり、複合的な答えが得られたものと感じられる。WSは様々な取り組みの重要な要素であり、他の取り組みと切り離しては考えられないことの表れであろう。

各「島」にあげられたカードの記載内容

薬剤師教育に対する意識が高まった

- 大学教員が薬剤師について認識するようになった (KI)
- 実習受入の動機付け (YK)
- 実務実習への参加意識が高まった (下)
- 実務実習に対する意識が変わった (YK)
- 薬剤師教育に対するモチベーションがあがった (FY)
- 大学人にとっては、世のニーズに正面から向き合うチャンスになった (NO)

医療現場の意識が低い

- 医療現場は大学に対して批判的である (YK)

受け入れ側の意欲・意義・認識が低い

- 認定実務実習指導薬剤師の肩書きのために参加 (YN)
- 頼まれてイヤイヤの参加→身になっていない (YN)
- DVD/WS 修了者で未登録者が5000人もいることは理解できない (KI)

大学組織としてのモチベーションが低い

- 大学法人の実習の重要度に対する理解 (KN)

大学でのモチベーションが低い (教育について)

- 大学教員に全く変化の無いひと (WSに参加しても) が多くいるように思える (榊)
- 大学教員 (基礎) に医療現場が理解されていない (KN)
- 大学の非実務家教員の中には、何故自分が WS に参加しなければならないのかと思っている教員もいる (KI)

教育技法の理解が深まった

- 指導法のアウトラインの理解 (YK)
- 教育の基本概念を学ぶことができた (下)
- 技能態度の重要性が意識されはじめた (NO)
- 学部教育において SGD 演習が積極的に取り入れられるようになった (FY)
- 教育方法として方略と評価があることを知った (YN)
- 一方的に教えることがなくなった (YN)
- 参加者はカリキュラムを知った (NO)
- 教育について皆が考えるようになってきた (NO)
- 薬学会のコアカリキュラムは別世界のものであったが、しかたがなく読むようになった (榊)

教育技法の理解が足りない

- 20万人以上いる薬剤師の中に WS 他に変化することに興味のない人がいる (榊)
 - 評価の対象がいまだに技能のみと考えてしまう WS の理解不足 (YN)
 - WS で参加者が議論した内容がカリキュラムの改善につながっていない (FY)
 - コース・ユニットに基づく評価は行なわれていない? (NO)
 - 知識過剰の考え方 (NO)
-

連携の重要性が明確になった

- 教育は連携することによって成立することがわかった (YN)
- 大学薬局病院が連携して教育を行なうことが理解できた (下)

様々な面で連携が始まった

- 様々な面で連携が始まった (NO)
- WSにより全国的または地域の薬剤師の交流が図れるようになった (榊)
- 大学・病院・開局の交流がもてるようになった (榊)
- 病院と大学での連携に関して協議する場ができた (KN)
- 医療現場と大学間に交流ができた (KI)
- 人的ネットワークが広がった (山)
- 地域での受け皿づくりで共通の話題・認識づくりに役立った (下)
- 薬局現場で問題となっていることがだんだんと理解できるようになった (FY)
- 現場での立場の違いによる思い入れの違いがわかった (下)

様々な面で連携が足りない

- 受け入れ体制と大学との連携が十分にできなかった (下)
- 氷山の一角の情報共有になっていることにかわりない (榊)
- 教育現場との同時進行の形だったので、情報の共有が十分にできなかった (下)
- 依然として現場と大学におけるギャップがある (FY)
- 薬学教育と薬剤師教育の考え方のギャップ (NO)
- 教育に対する実習薬局の問題意識のギャップ (榊)

WS の教育技法を応用できた

- 学生指導により業務の効率化を図る意識が持てるようになった (YK)
- 常に現場を意識した講義ができるようになった (KI)

WS の教育技法が活用できていない

- カリキュラム作成は WS に参加しても、やはり難しい (YK)
- あいかわらず WS の手法・成果を自分の日常業務に活用できない (榊)
- 薬局薬剤師の教育法に対する取り組みは大きく改善していない印象 (YK)
- 実習スケジュールの作成を施設が行なうことを知らない薬剤師がいる (YK)

WS の評価ができていない

- WS の評価 (これまでの) を客観的に行なうことができなかった (下)

WS の質を向上させる必要がある

- WS からの広がりが少ない (KN)
- さらに深い教育 (実践的なもの) へのステップができなかった (下)
- WS に 1 回参加ではその主旨が理解できずに変化できない (YN)
- タスクフォースを経験しないと内容 (手法含めて) を反映できる人は少ないのではないかと (榊)

WS の広報システムが未発達である (WS 数が不足している)

- 薬剤師会役員と会員の間に知識 (実習に関して) に相当の差がある (YK)
- 実務実習が末端の薬剤師まで理解されていない (KN)
- 全ての職員が参加できないので未参加者は WS を知らないまま (YK)
- WS 参加者のみで他の薬剤師が薬学教育を考える場が持てなかった (下)

第11回薬学教育改革大学人会議アドバンスワークショップ 第一部 報告書
「これからの実務実習指導薬剤師養成ワークショップのあり方について」

II チーム B 班 村山恵子 (第一薬科大学)

第一部では、「認定実務実習指導薬剤師が一施設に1人、全国1万人を越えました。さて、ワークショップによって変化したこと、変化しなかったことは？」をテーマに、KJ法を用いて、現在までのワークショップ(WS)の有用性と問題点について抽出し、整理した。

まず、A: WSにより変化したことについては、以下のような意見が挙げられた。

A1. カリキュラムの理解がすすんだ

・現場薬剤師に実務実習が新しい学習方法であることを知らせることができた ・到達目標(SBO)に対する共通意識が持てるようになった ・学習のプロセスが理解でき、実習に生かせそう ・教育の主体が学習者にあるという意識が強くなった ・SGDという方法がポピュラーになった ・カリキュラムの作り方がわかった ・目標、方略、評価の周知・学習者中心で教育が行われなければならないという考え方が理解できた ・評価について新しい考え方を広めることができた ・WSでの手法が広く認識されるようになった ・カリキュラムに対する考え方が明確になった ・コアカリキュラムを意識し、業務との関連を考えるようになった

A2. 指導薬剤師の意識が変わった

・日常業務をどう教えるかという点を考えるようになった ・薬剤師として自分たちに何が足りないかが分かった ・病院薬剤師として「教育とは」と考えるようになった ・“教育は共育”自分たちも変わることが分かった、変わった ・現場の薬剤師の意識に明確な違いがでた ・現場の先生方のもモチベーションが上がった ・薬剤師が“人に教える”と言うことに対して変わってきた ・実務薬剤師の共育貢献に対するモチベーション UP ・受け入れる薬剤師の意識向上

A3. 薬剤師同士の連携がとれるようになった

・同じ研修を通して、地域で力を合わせて実習をすすめようとする意識が高まった
・薬剤師同士の交流が深まった ・共育について地域で考えるようになった ・地域の薬剤師が集団で問題点を共有し、解決策をSGDで出せるようになった

A4. 大学と現場の連携がとれるようになった

・大学、病院、薬局の連携が強くなった ・大学、病院、薬局の連携が深くなった
・大学教員と現場薬剤師の間でコミュニケーションをとることができた ・大学教員とのコラボレーションをどのようにとるか考えるようになった ・薬剤師と大学教員とのふれあいができた
・病院、薬局薬剤師の研究マインドの向上と大学との研究での連携・大学教員の中で、医療現場に対する理解がある程度深まった

A5. 孤独なカード

・受け入れ施設の問題点が明らかになった

次にB: 変わらなかったことについては、次の様な意見が出た。

B1. 具体的な方略の実現ができていない

・実務実習を具体的にどう行うかという事務的作業の周知ができていない
・受け入れた施設で実習ができるかどうか不明確なままである

B2. 指導者の意識が維持できない

- ・強制されて研修を受けるという受け身な意識・まだまだ指導者自身が考えない
- ・WS を体験しても能動的になれない ・WS に参加した時のモチベーションが時間が経つと消えてしまう ・WS でのモチベーションの維持ができていない

B3. 大学教員の意識にばらつきがある

- ・大学教員の中で、全く変わらない教員がいた ・大学教員内での実務実習に対する温度差は今も大きい ・多くの大学教員が薬学教育の変化から落ちこぼれている
- ・大学教員の実務実習に対するモチベーションが低い ・大学の対応に大きな変化がない ・大学の教育現場での考え方はあまり変わらない ・一部かもしれませんが、大学が変わっていない ・大学内の教員間の温度差が明確になった（このカードは A : WS で変わったこととして挙げられたが、話し合いの中で B の島の中に分類された。）

B4. 指導者の教育手法が変わらない

- ・変わらない人は変わらない ・“教える” ことが昔のまま… ・実習に対し、自分の取り組む姿勢が明確になっていない（指導薬剤師） ・教授錯覚は今も続いている。・これまでの実習の延長線と思っているものがあること ・単に業務を教えればよいと思っていること

B5. WS の波及効果が受け入れ施設に広がらない

- ・実習には関係ないという薬剤部員がかなりいること ・施設で1人の薬剤師が変えようと思っても、全体を変えるのは難しい ・受け入れ施設で下のものは、あまり理解していない ・WS に参加していない薬剤師の意識は変わっていない ・医師や看護師など病院内の他の職種に理解されていない

B6. 連携が不十分

- ・薬剤師会と病院薬剤師会がいまだに別々 ・大学と現場の連携は今もまだ充分にとれていない ・病院薬剤師と薬局薬剤師の連携に大きな変化がない ただし、最近地域連携パスが進みつつある？

B7. 孤独なカード

- ・4年制卒薬剤師の質の向上に対する方略がない ・これまでも、これからも実習生を受け入れない施設が現存すること ・大学の学生への実務実習に対するオリエンテーション（主旨は、学生に対して「指導者も WS や研修などで、実務実習のために学習し、努力している事」をオリエンテーションなどで説明することが望ましいというものであった。）

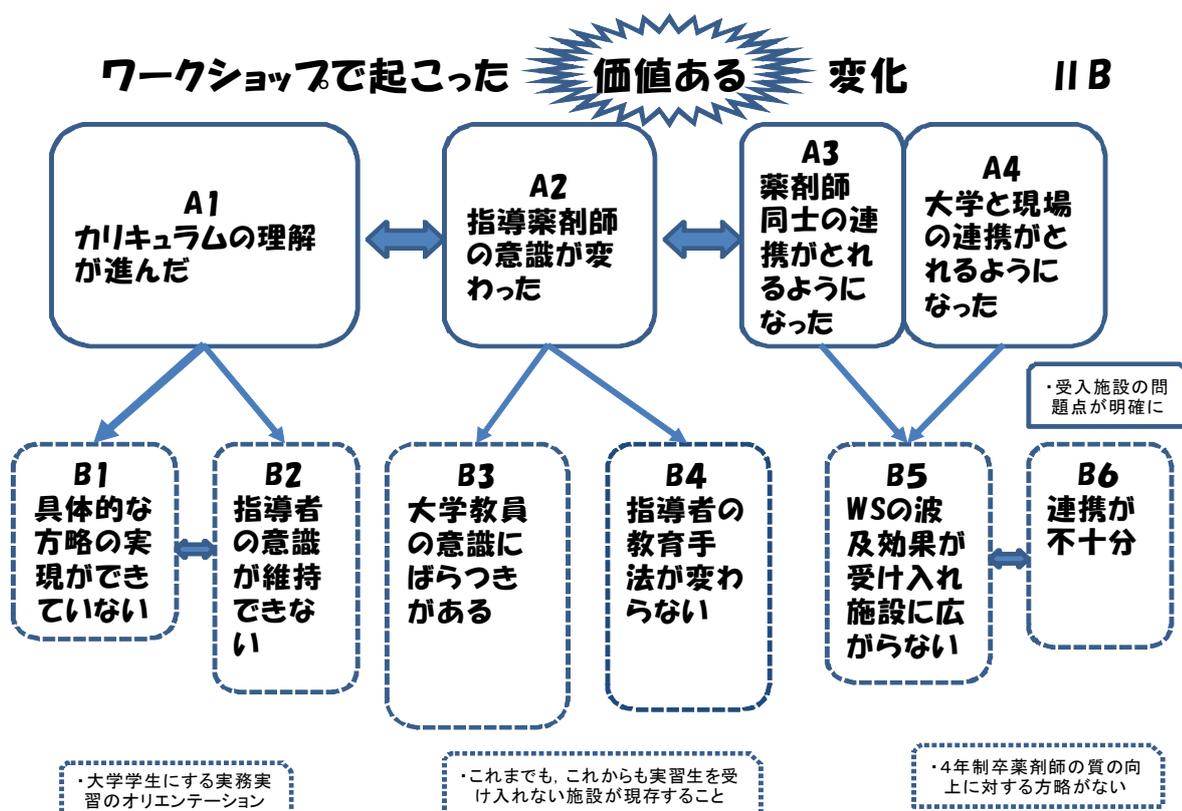
これらのカードを眺めてみると、変わったことと変わらなかったことは表裏の関係にあり、それぞれを対比させて図式化を行うことになった(図)。図に示した島のうち、上の段に実線で囲んだものは「変わったこと」、下の段には「変わらなかったこと」を点線で囲んで示した。また島の面積の大小は、カードの枚数の多少を表している。

表題を考える際には、ぜひ WS を前向きに捉えたいとのメンバーの気持ちを込めて、「WS で起こった“価値ある”変化」とした。

結論 WS により大きく3つの変化が認められた。まず、大学教員、医療現場の薬剤師を問わずカリキュラムや学習者中心の教育に対する考え方が理解できたということ。また、薬剤師が教育について考え始めたということ。さらに、大学と薬剤師間の連携のみならず、薬剤師同士の連携も生まれたということである。WS の目的は、薬学教育に関心を深め、カリキュラムの立案や実線能力を身につけることにある。これらの変化は、まさに WS がその本来の目的を果たしていることを示している。

一方、このような大きな変化が起こってはいるが、依然として、薬剤師や大学教員の意識に変化がない、あるいは意識レベルに大きな差があり、意識の低いところは未だに変わっていないという現状が問題点として浮かび上がった。また、WSの参加者はWSの有用性を感じていてもそれを個人の力で普及させることに困難を感じている事や、薬剤師や大学の連携が進んだと感じられる一方で、連携が未だにとれない部分もある事が構造的な問題点として挙げられた。

このようにWSは、本来の目的を果たしつつ、薬学に関与する人々に新たなふれ合いや連携を築いてきたが、WSを受けた後の指導者のモチベーションの維持や大学教員の意識など、意識やモチベーションの問題と、教育について分かったが実践の難しさなど、具体的手法の習得がこれからの問題点として明確化された。



第11回薬学教育改革大学人会議アドバンスワークショップ
「これからの実務実習指導薬剤師養成ワークショップのあり方について」

第一部 「認定実務実習指導薬剤師が一施設に一人、全国1万人を越えました。さて、ワークショップによって変化したこと、変化しなかったことは？」

KJ法による問題点の抽出

IIチーム C班 中村辰之介（新潟薬科大学）

上記お題でKJ法により最初に「変化したこと」、次に「変化しなかったこと」の抽出を行った。カードが語ることを聞き、情報の整理のために、島を作り、島に名札を付けた。全体のタイトルを我が班は「今後のWSをより良くする為に！」とした。

今回、島相互の関係を提示するまでには至らなかったが、1番から3番の島は全体として良い方向への変化、4番は変化があったこともあり、なかったこともあり、5番から10番までは、望ましい変化が見られなかった/問題の島と言える。代表的なカードと共に、島の名前を列記する。

1番の島の名前「薬学教育がより方向へ変わった」

薬剤師職能の向上に対して目標が明確になった・薬剤師会の受け入れの考え方・どのようにモデルコアカリキュラムに沿って行うか・医療人教育の話しを聞いて人のために働く気持ちが強くなった・学生に自己啓発させる有用性・カリキュラムプランニングの方法・実習に対する大学、病院、薬局の取りくみ・薬剤師、教員の6年制薬学教育に対する自覚・教員が研究のみでなく教育者としての自覚を持つようになった・基礎系教員にも実務実習に対して関心を持ってもらうことができるようになった・教育に参加するという薬剤師個人の考え方・教員が授業のやりかたを見直すようになった・・・など 桂、Tai、TM、中、さと、山、しゆ、JI、HHと9人全員から18枚のカードが集まった。

2番の島の名前「WSは人間関係をつくる重要なツールとなりうる」

人間関係・他での薬剤師の考えや地域性などを知ることができた・大学、病院と薬局薬剤師間でコミュニケーションがとりやすくなった・各立場の指導者の情報共有できるようになった・大学教員が現場の実情を知る機会となった・役人と知り合いになれた・全国の薬剤師の現状や問題点が見えてきた・・・など 山、中、Tai、しゆ、さと、桂、JIと9人中7人、13枚のカードが集まった。

3番の島の名前「WSで現場が良い方向に変わる」

大学の施設を薬剤師会の研修などで使用する機会が増えた・薬剤師会等で行う会議にSGDが多くなった・WSの手法を職場に取り入れ問題が改善した・WSという形式を知った・地域の勉強会がWS形式になった・・・など HH、Tai、しゆ、桂、さと、JIの6人から7枚のカードが書かれた。

4番の島の名前「大学の考え方」

目標、方略、評価などに共通する認識が生まれた・使用する言葉が教育用語的になった・教員、病院薬剤師、保険薬局薬剤師が共通の言葉で実習を論じることができるようになった・一部の大学教員の6年制薬学教育に対する認識に変化が見られない・授業のスタイルを変えても中身はそのままの教員がいる・・・など さと、中、HH、Taiの4人から7枚のカードが書かれた。

5番の島の名前「WS終了後の行動の変化が無い」

自身の行動様式がWS仕様に変化した・WSで得たことを行動にすることができていない・WS終了後の参加者の行動に変化がない・WS終了後数ヶ月経つとWSで得たことは忘れられる・「うちの薬局ではこうやる」・WS終了後モチベーションが持続しない・・・など 中、さと、HH、山、さと、JIの6名から6枚のカードが書かれた。

6 番の島の名前「他人まかせ」

他人まかせの行動・自前のカリキュラムでなく、よそのをまねしようとする気持ち・指導方法のマニュアルをほしがり、自分で考える労力を払わない・大学と薬剤師会におけるWS関係者以外の人達との関係・実務実習に関与するのは現場の薬剤師の先生方で、大学教員の関与は一部の教員が最低限の関与でよいという考え方・・・など しゆ、TM、桂、Tai、JI の5人から5枚のカードが出てきた。

7 番目の島の名前「WS自体の問題点」

休日がなくなった・WSのスケジュールや内容、特にアイスブレイキングのテーマ・タスクフォースの依頼方法・WSの企画、運営が大変なこと・様々な業務で時間が無くなった・・・など しゆ、Tai、JI の3人から5枚のカードが出てきた

8 番目の島の名前「資格へのこだわり」

自分も資格をとらなければという焦り・個人のスキルアップのためであり、学生への指導がおろそかになる・資格だけほしがるひと・・・など TM、しゆ、桂の3人から3枚のカード

9 番目の島の名前「未受講者との差」

WS参加者と参加していない薬剤師との間のモチベーションの差・未受講者のおまかせの気持ち・・・など Tai、TM の2名から3枚のカード

10 番目の名前「未解決」

WSで問題点が抽出されても、そこまでで終わっている・病院実習で学生に指導する内容がかわらない・現状と異なったコアカリへの不満がある・受け入れに対する現場の不安・・・など JI、しゆ、桂、山の4名から5枚のカード

日常の業務に対する負担や影響が増大する方向に変化した・研修センターの考え方が変わらない・・・というカードもありました。

このアドバンスワークショップに参加して、新しい考え方を知ったということにはなかったように思いますが、自分の考え（教育者養成のためのWSは問題をかかえつつも、今後も継続することが必要であり、WS参加者を一人でも多く増やす努力が重要であるというという考え）をチームメイト8名も共有しているということを知ったことが収穫です。他の班の発表を聞いても、同様な認識であるという感想を持ちました。今回のアドバンスワークショップに参加できて良かったです。タスクの原さん、寛さんには語りたいた事を我慢させていただきました。戸部さん、戸田さん、阿部さん始め企画し実行してくれた皆様、ありがとうございました。チームの皆様、参加した皆様、またどこかで会いましょう。

第二部

「平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成ワークショップの目標を設定し、目標達成に向けたアクションプランを提案しよう」

第二部 作業説明

午前のセッションのまとめ

- 教育者WSは、日本の薬学教育を改革するために行われた。
- 認定実務実習指導薬剤師を、確かに一万人は養成したが、どこでも実習ができるためには、まだ不足している。
- 平成22年度から日本薬剤師研修センターの運営方針が変更になる。平成23年から未定。
- でも、まだ当初のGIO（日本の薬学教育の改革・指導者の養成）には到達していない。

WSで変わってきた事

- 薬剤師教育に対する意識が変わった。
- よい人間関係ができ、施設－大学間で連携がとれるようになった。
- WSに参加を希望する薬剤師が増えてきている。

WSの意義を再確認！

- カリキュラム・プランニングの修得の場
- 実務実習指導薬剤師養成の場
- 大学、薬局、病院の問題解決のための情報交換の場
- 薬剤師教育について議論をする場
- 人を育てる！

国の補助がないからといって止める訳にはいかないですよ？

第二部

「平成23年度以降
実務実習指導薬剤師養成ワークショップを継続する場合、どのような目標を掲げて継続しますか？」

ワークショップの趣旨(抜粋)

教育とは
「教師が事実であると信じていることを学習者に話し伝えること」と考えられてはいないでしょうか。

このワークショップでは、教育を「学習者の行動(知識・技能・態度)に価値ある変化をもたらすこと」と捉えています。
学習者の到達すべき目標を設定し、教える側全員がこの目標を理解した上で、教育の方法、評価法を具体的に作りあげ、学習者が目標に到達したか、この教育の方法そのものが妥当であるかなどを評価し、より良いカリキュラムを作りあげていく手法を体得することが必要です。そしてそれがこのワークショップの目的なのです。

はじめに

なんのために続けていくかを
検討してみましょう！

平成23年度以降のニーズについて検討してみましょう！

- 平成23年度以降は白紙です。
- 認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップについて考えてください。

例えば

- 継続していく理由は何でしょうか？
- 数値目標だけでよいのでしょうか？

次に

それぞれの具体的な
アクションプランを
提案してみよう！

ワークショップを運営するための
体制はどうしますか？

作業説明

- 具体的なアクションプランの提案をして下さい。
- いつ(when)、だれが(who)、どこで(where)、何を(what)、どのような方法で(how)を具体的に明示してください。

具体的に提案を

- いつ、誰が、どこで、何を、どのような方法で実施するかを提案
- 誰が：県薬剤師会、地区薬剤師会、個々の薬局、日本薬剤師会、各大学レベル、複数の大学、地区調整機構、薬学会など
- パワーポイントで発表

指導薬剤師の認定方法についても、
議論をしてみてください。

平成23年度からのWSのあい方

- なんのために（ニーズ）：

アクションプラン(実施方法)

- いつ：
- 誰が：
- どこで：
- 何を：
- 方法：
- 備考：

作業説明

- 作業時間 80分
- フロダクト/パワーポイントで
- 集合時間/14:20
- 発表/各グループ4分、総合討論15分
(P毎に別れて)
- 司会進行係り、記録係、発表者を
決めてから作業を始めて下さい。
- さらに、報告書担当者も決めて下さい。

第二部「平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成ワークショップの目標を設定し、目標達成に向けたアクションプランを提案しよう」報告

I チームA班 近藤 直緒美

平成23年度からのWSのあり方、何のためにワークショップをするか

1. 新規の指導薬剤師を養成する
 - ・受け入れ施設の数を維持する
 - ・指導薬剤師の数を増やす
2. 既存の指導薬剤師のスキルアップ
 - ・指導技術を向上させる
 - ・受け入れ経験者と未経験者との情報交換
 - ・タスクフォースを養成する
 - ・指導薬剤師資格の更新

すべては「質の高い実務実習を継続させ、更に高める」ために行う

アクションプラン(実施方法)

1. 新規の指導薬剤師を養成するためのアクションプラン
 - ・いつ：受け入れ施設と実習生希望地域の比率を勘案してから回数を決める
 - ・誰が：各地区調整機構
 - ・どこで：受け入れ地域の大学
 - ・何を：これまでのWSを引き継ぐ(カリキュラムプランニング)
 - ・方法：これまでのWSを引き継ぎつつ、討論のテーマを増やす
 - ・備考：実習希望場所を精査する
各地区調整機構が修了証を発行、認定は研修センターが行う
参加費の個人負担が発生
2. 既存の指導薬剤師のスキルアップのためのアクションプラン
 - ・いつ：指導薬剤師の更新のために3年に一度、2日間のWS受講を必修とする
更に支部単位のWSを年に一度1日間開催
 - ・誰が：各地区調整機構
 - ・どこで：大学、支部
 - ・何を：実習実施後の問題点について検証
指導薬剤師のスキルアップ、タスクフォースの養成
 - ・方法：問題点の抽出→解決策の策定
 - ・備考：WSと並行して講習会も開催
各地区調整機構が修了証を発行、認定は研修センターが行う

第二部 平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成のワークショップの目標を設定し、目標達成に向けたアクションプランを提案しよう

I Bグループ 加藤 善久
(徳島文理大学香川薬学部)

第二部では、平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成のワークショップの目標を設定し、目標達成に向けた具体的なアクションプランを提案するために、平成23年度以降のワークショップのあり方として、なんのために（ニーズ）実施するかを議論した上で、いつ、誰が、どこで、何を、どのような方法で実施するかアクションプランをSGDにより議論した。また、指導薬剤師の認定方法についても議論した。

まず、平成23年度以降どのような目的でワークショップを実施するか（ニーズ）について議論した。その結果、次のニーズが挙げられた。

1. 質の良い薬学教育のために、
2. 実務実習に関わる全ての薬剤師のために、
3. 実務実習に対する指導薬剤師のモチベーションを維持していくために、
4. 指導薬剤師の欠員補充のために、
5. 指導薬剤師の拡充（1施設1名ではなく、複数の指導薬剤師を養成し、年齢も幅広く養成する）のために、

しかし、これらのニーズの議論を行なう中で、これまでのワークショップの内容や成果を評価しないのか、評価すべきである、各地区により実務実習指導薬剤師の充足率に大きな差があり、それぞれの地区の事情が異なる、ワークショップの運営費の補助金がなくなり、運営費をどのように賄うか、実務実習指導薬剤師の認定にこだわるかなどの意見が出され、議論は白熱した。さらに、ニーズを考える過程において、平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成のワークショップは、これまで同様の実務実習指導薬剤師を養成するためのワークショップを開催するのか、あるいは、従来の実務実習指導薬剤師養成のワークショップに参加した薬剤師が、さらにレベルアップを図るために参加するアドバンストワークショップを開催するのか、いずれを議論すべきかについて意見が分かれ、議論が暗礁に乗り上げた。ここで、タスクの助言もいただき、第二部では、従来の実務実習指導薬剤師養成のワークショップ開催のためのアクションプランについて、議論することとなった。

そこで、アクションプラン1として、これまでの実務実習指導薬剤師養成のワークショップの検証をすることが提案された。平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成のワークショップを開催するか否かは白紙の状態であるが、ワークショップを継続して開催していくという基本姿勢の基、アクションプラン1では、実務実習1期終了後に、実務実習の実施に関する問題が、出てくると考えられるので、まず、その問題点の検証を行う。具体的には、平成22年度の実務実習1期終了後に、薬学教

育関係者全員が、日本薬学会に集まり、ワークショップ形式で、これまでの実務実習指導薬剤師養成のワークショップのあり方を見直す作業を行う。

次に、アクション2として、平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成のワークショップの予算を獲得する方策が提案された。その方策として、平成22年の実務実習1期終了後すぐに、薬学教育関係者全員が、六者懇（日本薬剤師会、日本病院薬剤師会、厚生省、文部省、国公立大学薬学部長会議および日本私立薬科大学協会の代表）の場で、文科省および厚労省に対して、平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成のワークショップの財政支援を要求するため、大学および受入施設（病院や薬局等）におけるワークショップの有用性のエビデンスを集め、ワークショップ運営費の財政支援に関する提言をする。

さらに、アクション3として、平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成のワークショップの運営体制の確立について提案された。実務実習指導薬剤師養成のワークショップの質の担保を確保するため、認定はこれまでどおり、日本薬剤師研修センターが行い、各地区の実情に合わせて、薬学協議会が、各地区の調整機構を通じて、それぞれの地区の薬科大学あるいは薬学部で、実務実習指導薬剤師養成のワークショップを開催し、これまでどおりのワークショップと同様にワークショップの成果報告書等を作成するという体制の確立である。この体制は、各大学の責任において、大学がイニシアティブを取り、実務実習指導薬剤師を育てるという考え方に基づいている。

また、現行の実務実習指導薬剤師養成のワークショップでは、薬局薬剤師、病院薬剤師、大学教員の比率が6：2：1であるが、すでに、大学教員は薬学教育者ワークショップに参加しているため、参加していない教員がいなくなっている。これを受けて、大学教員の2回目の参加者はアドバイザーとして参加するよう提言することが盛り込まれた。

以上、平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成のワークショップの目標を設定し、目標達成に向けた具体的なアクションプランとして、以下の3つのアクションプラン、

1. これまでの実務実習指導薬剤師養成のワークショップの検証
2. 平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成のワークショップの予算獲得の方策
3. 平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成のワークショップ運営体制の確立

が提案された。

「平成 23 年度以降の実務実習指導薬剤師養成ワークショップの目標を設定し、目標達成に向けたアクションプランを提案しよう」

I C 班 宮本 秀一
(崇城大学)

標記の課題について、我々の班では最初にフリーディスカッション形式で少し討議をした。その後、タスクフォースによって予め準備されたパワーポイントの記載案に沿った形、すなわち、「目標設定」に関しては、「平成 23 年度からの WS のあり方：何のために（ニーズ）」というくりで、「アクションプラン」については、「アクションプラン（実施方法）：いつ、誰が、どこで、何を、方法、備考」という分類で、討議するとともに、まとめを行なった。

前半の最初に、平成 23 年度以降の実務実習指導薬剤師養成ワークショップの必要性に関して議論がなされた。現在必要最低限の指導薬剤師が養成されているので、今後彼らが中心になって進めていけば、更なる指導薬剤師の養成は必要ないのではないかという意見も出たが、転勤などによる指導薬剤師の局在化の問題や、指導者の資質向上の必要性などを総合的に考慮すると、指導薬剤師養成の“継続は当然”であるという結論に至った。そこであらためて平成 23 年度からの WS のあり方について“何のために”実施するのかの観点に立って討議し、以下に記すような事項としてまとめられた。それら事項が挙げられた背景には、実務実習をより有意義なものとするためには指導する側がしっかりしていかなければならないという思いがあることが、討議の中で確認できたと思われる。

《平成 23 年度からの WS のあり方》

★何のために（ニーズ）：

- ・ 余裕を持った指導薬剤師人数の確保のため
- ・ 教育に関する専門言語の共有化のため
- ・ カリキュラムプランニング啓蒙のため
- ・ 実務実習に対するモチベーション維持のため
- ・ 指導者の資質向上のため
- ・ 大学・病院・薬局の立場の共通な問題意識をもつため

後半では、上記のようなニーズに応えるためのアクションプランは、どのようなものになるかについて議論した。その結果、以下のようにまとめる事ができた。特徴としては、回数や人数などについて、抽象的な表現にとどまるのではなく、具体的数値を盛り込むよう心がけたことが挙げられよう。

《アクションプラン（実施方法）》

★いつ（頻度）：23 年度以降、全国総計年 30 回実施する。

★誰が：文部科学省・厚生労働省
薬学教育協議会

日本薬剤師研修センター（認定元）

★どこで：各調整機構 8 ブロック

★何を：今まで通りの内容

★方法：今まで通りの WS 形式

★備考：毎年全国で千人程度の実務実習指導薬剤師を養成する。

スキルアップの WS も別に必要である。

認定薬剤師（のシステム）は必要である。

（文部科学省・厚生労働省からの）補助金の継続は不可欠である。

第二部「平成23年度以降の実務実習指導薬剤師養成ワークショップの目標を設定し、
目標達成に向けたアクションプランを提案しよう」 報告書

ⅡチームA班 市原 和夫（北海道薬科大学）

【はじめに】

「実務実習指導薬剤師養成ワークショップ」開催に対する行政からの資金補助が終了したことを受け、平成22年度のワークショップ開催については「薬剤師研修センター」の支援が得られているが、平成23年度以降は白紙の状態である。第一部「実務実習指導薬剤師養成ワークショップによって変化したこと、変化しなかったことは？」では、このワークショップを未受講の薬局薬剤師、病院薬剤師で受講希望者がまだまだ沢山いて、順番待ちをしている現状が報告された。したがって、実務実習指導薬剤師の「新規育成」も含めてこのワークショップを継続することを前提に第二部での議論を進めた。

【平成23年度からのワークショップのあり方】

○実務実習指導薬剤師の新規育成

- ・認定実務実習指導薬剤師の登録者数が1万人を超えたといっても、まだまだ必要
- ・受講希望者、認定実務実習指導薬剤師資格取得希望者が多くいる
- ・退職・転勤等による認定実務実習指導薬剤師欠員の補充(消極的ニーズではあるが現実的な問題)

○交流の場としての活用

- ・ワークショップに参加して、薬局薬剤師・病院薬剤師－大学教員の間での交流ができた、深まったとの意見が多く、ワークショップの開催目的の一つである。

○実務実習の質的向上⇒この問題は第三部で取り扱う

- ・指導薬剤師の質向上（既受講者にもフォローアップワークショップ、アドバンストワークショップなどを提供）
- ・学生・大学・実習施設からの実習に関する評価をフィードバックした実務実習指導薬剤師養成ワークショップ。実習内容の再構築、モデル・コアカリキュラムの見直し。

○1期、2期、3期実務実習終了後の会合が提案されたが、それは各地区、各大学が実習施設と個別に実施することで、実務実習指導薬剤師養成ワークショップとは別の問題とされた。

【アクションプラン(実施方法)】

- いつ：各地区の事情により実施する
- 誰が：地域の大学主体(共同体)、各地区の調整機構

- どこで：大学の施設など、経費を節減できる施設を利用
- 何を：平成 22 年度の実習の経験を通じて、現状の問題点を踏まえた指導薬剤師の育成
- 方法：従来通り（2 日間開催、日・日開催も考慮

1S タスク 3 名⇒2 名に変更

受講生 1S（大学は必ず 1 人、病院・薬局で按分）

- 備考：経費の掛からない方法を模索

- ・複数の地域にまたがる合同開催(経費節減策)
- ・各地域のタスクフォースで実施する(経費節減策)

受講者の選択方法の公平性（大学が主催すると、都合の良い人を選択する？）

【認定方法】

- 認定主体

1. 薬剤師研修センター（これまでの認定実務実習指導薬剤師との同等性から）
薬学教育協議会が薬剤師研修センターにお願いする
2. それでもだめなら、薬学教育協議会が認定主体となる

- ビデオ講習（DVD 講習）ア、イ、ウ、エ、オの教材が古くなっている
教材を新しくする。そのためのワーキンググループが必要

第2部「平成22年度以降の実務実習指導薬剤師養成ワークショップの目標を設定し、
目標達成に向けたアクションプランを提案しよう」

Ⅱ—B チーム 日本薬剤師会 曾根 清和

実務実習指導薬剤師養成ワークショップ（以下WSと略す）の、指導薬剤師養成における有用性、必要性はグループの誰もが認めるところであった。

- ・ 参加型薬学教育（特に実務実習において）を充実させ、魅力的な薬剤師教育を進める
- ・ 認定指導薬剤師をさらに育成し、薬剤師の人的資源を充実する
- ・ 教育機関としての施設間の格差を解消する

これらのためにも、WSが必要であることが討論され、確認された。

具体的なアクションプランの討議に移ると、

- ・ 認定のあり方
- ・ WSのあり方

二つの論点が交錯したディスカッションになり、討議は盛り上がったが明確なプロダクトには到達できなかった感想をもった。

WSを受講したのに、認定を申請しない薬剤師が多数いること、認定指導薬剤師以外の現場の薬剤師と温度差があること、認定実務実習指導薬剤師を希望者数が不明である、コストは誰が負担すべきなのか、認定機関が今のままで良いのかなどの問題点が浮かび上がった。また、現場の薬剤師が参加型教育、後継者育成を理解できた、大学教員と実務薬剤師の交流・理解が深まった、地域で実務薬剤師の交流が深まったなどの利点も話し合われた。

仮にWSが認定条件になっていなければ、現在のような前向きな薬局実習体制は組めなかったかもしれないし、方略としてWSは現状では最良のものと言えよう。しかし、方略の一つである。第3部でもふれられるが、実務実習における認定実務実習指導薬剤師の目標を明確に定めた上で、方略としての「WS」を構築すべきであろう。

ともかく、平成22年5月からはじまる長期実務実習で、指導薬剤師、施設、地域そして大学の真価が問われる。教育が共育であり、国民の要求に応える医療人・薬剤師育成のために関係者の努力を形にしたい思いをひしひしとを感じるSGDであった。

第二部 「平成 23 年度以降の実務実習指導薬剤師養成ワークショップの目標を設定し、
目標達成に向けたアクションプランを提案しよう」

II チームC班 石崎 純子
(金沢大学)

第二部では、平成 23 年度以降の実務実習指導薬剤師養成ワークショップ（以下、薬剤師WS）の目標を設定すること、そして、その目標達成に向けた具体的なアクションプランを提案することが課題として提示された。平成 23 年度以降、薬剤師WSを継続するか、継続するとすればどの程度の規模で実施するか？受講者数はどれくらいか？年間の実施回数は？など内容は未定であるとの説明があった。

スモールグループディスカッションでは、「薬剤師WSの目標」という表現をより具体化した「何のために薬剤師WSを継続していくか？（ニーズは何なのか?）」について議論した。まず、薬剤師WSは今後も必要か？について意見が述べられた。グループ全員が、薬剤師WSの継続の必要性は認識していたが、ニーズについては、職種、地域など、それぞれの置かれている環境によって、今後の薬剤師WSに対する考えが様々であった。例えば、学生数に対する認定施設数が充足している地域では、実習継続に支障の無いよう比較的規模を縮小しての実施をイメージしているのに対し、学生数が多く認定施設が足りているものの指導薬剤師の退職などを考慮すると実習継続が困難なケースが想定される地域では、薬剤師WSの開催は現状でのペースを維持しなければならないという認識であった。

我々の班で協議した「何のために薬剤師WSを継続していくか?」を以下に示す。

1. 継続的に指導薬剤師を養成するために
2. 薬剤師の質を高めるために
3. 実務実習を効果的・効率的に実施するために
4. 実習の質を確保するために
5. コミュニケーション（連携）をとるために
6. （世代交代、補填のために）

その他の意見「今の参加者のニーズが以前と異なる」

基本となるニーズは、実習施設としての認定要件を満たすため、そして、実務実習の質を確保するためという、6年制教育に対応した実務実習を実施することに集約された。しかし、薬剤師WSは病院や薬局薬剤師、そして、大学教員が参加して議論するという、今までに無い職種間のコミュニケーション深める場となっており、実習という1つの目標に対して連携して取り組む意味で非常に有効である。ここで構築された連携を単に実習で終わらせるのではなく、更に発展させて、薬剤師業務に基礎

薬学的意見を取り入れる、あるいは、現場で起こっている問題を科学的検証によって明らかにするという新たな役割も果たし始めている。このような薬剤師WSの新たな功績が見え初めてきたのに、23年度以降が未定であるから縮小・中止という安易な考えではいけないとの意見が多く聞かれた。平成11年に教育者を対象としたワークショップが開催され、以降、平成15年より実務担当薬剤師に対象者を拡大、平成17年より現在の薬剤師WSの形で運営され修了者数が飛躍的に拡大し、参加者のニーズに自己のレベルアップを目指す声も多く聞かれるようになったとのことである。

次に、ニーズに合わせたアクションプランの提案、すなわち、薬剤師WSを運営するために、いつ(when)、だれが(who)、どこで(where)、何を(what)、どのような方法で(how)について議論した。ニーズ1～6(前ページ)を達成するための「アクションプラン(実施方法)」は以下である。

- ・いつ：22年度中
- ・誰が：各地区調整機構が
- ・どこで：中央調整機構会議で
- ・何を：ニーズ1～6(前ページ)を達成するためにWSの運営方法、ルールを決める
- ・方法：新たな小委員会の設置
- ・備考：WSの重要性をアピールする

スモールグループディスカッションをとおして地域によって考え方が異なっていることが認識され、まず、基本的な意志統一を図ることが、今後、より薬剤師WSを有意義なものにする上で重要であることが共通認識された。今回のアクションプランはニーズ1～6をまとめて記載したが、実際の実施にあたっては、一挙にすべてのニーズを達成するのではなく、ニーズを絞り、そのニーズに対応した小委員会を設置することが必要である。

薬剤師WSの継続実施についての問題点として、どのように資金を確保するか？薬剤師会がこれ以上支出することは困難であろう、私立大学で費用負担できないか？参加者からも多少の負担はやむを得ないのでは？文部科学省に補填を要請してはどうか？要請は誰がするのか？・・・大学、日薬、日病薬が、など踏み込んだ議論がなされた。

平成23年度以降の指導薬剤師の認定方法が未定とのこと、この点についても議論した。その結果、指導薬剤師の認定は従来どおり「薬剤師研修センターが行うのが望ましく、認定要件については今までと同じで良い」との意見となった。

今回、様々な地区の薬剤師WSの事務局・タスクとして尽力されている多くの方々の意見を聞くことができ、情報交換や連携の構築・発展の必要性を痛感した。

第三部

「実務実習指導体制を充実し、薬学教育改革
を推進するための方策」

第三部 作業説明

第三部 実務実習指導体制を充実し 薬学教育改革を推進するための方策

－WS、光と影－

第1部、第2部を振り返ってみましょう

- ワークショップによって変化したこと
- ・実習、コアカリに対する理解度の上昇
 - ・指導薬剤師の存在、役割と責任
 - ・現場と大学が一体となって教育にあたる協力体制の構築
 - ・実習に対する熱意・意識
 - ・教育の方法の多様化

今後の薬学教育を充実させるための具体的な方策

教育とは、学習者の行動に価値ある変化をもたらすプロセスである。

変化したこと・・・・・・・・
振り返って、さらなる充実・前進
では・・・・・・・・
変化しなかったことは
このままでいいですか？

このセッションで考えてみましょう

これからの作業

- 変化しなかったことについて・・・・・・・・
なぜ、変化しなかったのでしょうか？
- 1) 改善する必要があるか
 - 2) 必要があれば、どこから改善するか
(優先順位の設定)
 - 3) 改善方法の提案
マスタープランに則ったアクションプランの作成

作業に当たって意識して頂きたいこと

- ・第2部で提案されたWSの継続を踏まえて。
- ・実務実習が薬学教育の一本の太い柱である。
- ・より良い後輩を育てるために。
- ・どの規模で始め、どこまで発展させるか。
・・・・・・・・個人、組織、地域、全国？
- ・どこが主催するか。

プロダクトの内容

- 1) 変化しなかったことのうち、改善が必要な項目の列挙
- 2) 改善項目の優先順位の提示
- 3) 項目ごとにアクションプランをわかりやすく具体的に示す。
- 4) それぞれの項目が、どの規模から開始して、どこまで発展させるか。

なぜ、WS で変化しなかったのか？

第1部でWSによって変化したとこと変化しなかったことを抽出したが、大きな名札にすると同じ名札がどちらにも存在する。例えば、「連携」であれば、変化したこと「進んだ」と変化しなかったこと「思ったほど進んでいない」が挙げられた。それらの理由も踏まえて討議した結果以下の4つに改善項目が整理された。

改善項目（優先順位の高いほうから記載）

- 1) WSの趣旨・方向は理解できたが、自らが教育（行動）するまでには至らない。
- 2) 連携の重要性と意識の共有はできたが、行動するまでは至らない。
- 3) WS参加者と非参加者との溝がある。
- 4) 薬剤師と他医療職種との溝がある。

次に、各項目のアクションプランの作成をした。これからどうするか、実務実習が開始されてからどのように行動すべきかについて議論した。

項目1) WSの趣旨・方向は理解できたが、自らが教育（行動）するまでには至らない。

1回だけWSを受講しただけではなかなか行動が変われない。自分もタスクフォースをするようになって初めて意識や行動が変化した。しばらくすると忘れてしまう。といった意見が交わされ、以下のようなアクションプランとした。

- ① 1回だけでは身につかないので、スキルアップを目的としたWSを数回開催する。

いつ : 指導薬剤師が3年に一度、2日間のWSを必修とする。更に支部単位のWSを1年に一度1日開催する。

誰が : 各地区調整機構

どこで : 大学、都道府県、支部

何を : 実務実習実施後の問題点について

方法 : 問題点の抽出と解決策の策定

備考 : 各地区調整機構が修了証を発行し更新は研修センターがおこなう。

- ② WSと別に講習会を並行して開催する。

項目 2) 連携の重要性と意識の共有はできたが、行動するまでは至らない。

これから大学や病院や保険薬局との連携を実際におこなう方法について討議され、以下のよう
なアクションプランとした。

- ①実習後の4者合同報告会（大学、病院、薬局、学生）の開催。

これは、学生の声を聞く会とするので報告会とした。

- ②実習後の3者合同検討会（大学、病院、薬局）の開催。

報告会の結果も踏まえ、次のよりよい実習につなげるための検討会。

- ③情報の交換を行うシステムを構築する。例えば各大学で掲示板を作成する。

以上を3者間で実行するためには、大学がイニシアチブを執る必要があり（企画、実施）、大
学ごとにおこなう。

項目 3) WS 参加者と非参加者との溝がある。

自分だけが変わっても全体のものにならない。自分ひとりでは職場をかえることができない。
逆に孤立の危険もある。そこで、以下のようなアクションプランとした。

- ①教育技法の溝：WSに参加した者が、施設内の薬剤師にその内容を伝える。

WS資料・内容の公開が解禁されたことを周知させる。

DVDを見せて、他の薬剤師を指導する。

- ②教育技法の溝：非受講者にも薬学生の指導をさせる。

この過程で技法（特に評価のやり方）を身につけさせる。

- ③モチベーションの溝：非受講者にも薬学生の指導をさせる。

この過程でモチベーションを高めてもらう。（体験することで変わる）

- ④「役員・管理者のためのWS」を調整機構が開催する。

病院薬局長や大学・県薬剤師会・県病院薬剤師会などの各組織の上の人間がWSを受講して
いない場合が多いので、そのような人達だけのWSを開催すれば受講してくれるのではない
か。

項目 4) 薬剤師と他医療職種との溝がある。

チーム医療といいながら逆に病院においてあるのではないか。遠慮もある？

薬局では地域でどうなのか。溝を埋める、他職種との関係を深める方法として以下のような
アクションプランとした。

- ①実務実習をおこなっていくうえでこの壁は低くなっていくと思われる。

- ②実務実習が行われることを施設ごとに他職種の方々にアナウンスする。

- ③他職種で医療教育に関わっている方を、薬剤師のWSに参加してもらう。

以上

第一部で話し合った「実務実習指導薬剤師養成ワークショップ（WS）によって変化しなかったこと」で討論した問題点について再度見直し、改善策を検討した。

1. WS そのものが理解されていない

① 実務実習における WS の位置づけ

- ・ WS の目的は「カリキュラムプランニング」だと言っているが、それが実務実習を行う上で、どのような意味を持つかがはっきりしていない。
- ・ 参加型実習にする意義がはっきりしていない。

② WS の有用性、実務実習との関連性がわからない

- ・ WS が本当に有用なのか、実務実習を行う上で本当に必要なかがわからない。

③ WS の「偏見」がある

- ・ WS の意義や目標がオープンにされていないので、「WS を受けてください」と言ってもなかなか「受ける」と言ってもらえない。
- ・ WS が実務実習の指導とどう結びつくかわからないのに、受講する必要があるのかと思われている。

いろいろな問題点、改善項目があるが、実務実習の質を担保するには、実習に関わる薬剤師すべてが薬剤師実務実習指導薬剤師養成ワークショップ受講することが、最重要課題と考えた。

2. 実習（教育）に対する理解

① 教育に興味がない。意識の差

- ・ 薬局の経営者、病院長、大学の理事会など各組織のトップに実務実習に対する理解の差が大きすぎるため、実習生を教育しようという意識がないところがある。現場の薬剤師が実務実習に協力したいと思っても、経営者サイドが「No」と言う。

② 末端の薬剤師の教育に対する認識

- ・ 業務が忙しいのに、なぜ実習生を指導せねばならないのかと思っている。
- ・ 実務実習指導薬剤師の認定を取りたいのに、経営者が WS に参加させてくれない。

3. モデルコアカリキュラムの理解

① モデルコアカリキュラム、特に方略のことがわかっていない。

- ・ SBO ごとに方略が示されているが、それをどのように実習に組み入れていったらよいか、わからない。

② 具体的に実習をどうすればよいかわからない。

- ・ どのように実習をスケジュールアップしたらよいか、わからない。

4. 実習に対する熱意

① 大学の教員が変わっていない。

- ・ 実務実習指導薬剤師養成ワークショップの前身の薬学教育者のためのワークショップの頃に受講した教員の意識が変わっていない。
- ・ 特に基礎系を専門とする教員は、WS を受けたあとしばらくの間は実務実習について意識しているが、時間経過とともにその意識が薄らいでいる。

5. 組織の連携

① 病院・薬局・大学の間に見えない溝がある。

- ・ もっと協力態勢を強化せねばならないのに、見えない溝があって距離がなかなか縮まらない。

② 組織、団体の考え方、トップの意志に差がある。

6. 受け入れの対応

① 受け入れの不安が解消されていない。

上記のように問題点をまとめ、アクションプランは2つ作成した。

改善項目と順位

- 1) ワークショップそのものが理解されていない
- 2) 実習（教育）に対する理解
- 3) モデルコアカリキュラムの理解
- 4) 実習に対する熱意
- 5) 組織の連携
- 6) 受け入れの対応

アクションプラン

項目1) ワークショップそのものが理解されていない

アクションプラン

- ① WSの偏見をなくす広報活動をする。
- ② これまでのWSの効果を検証して、エビデンスの広報活動を行う。
- ③ 参加者に事前にWSの意義、目標を周知する。

規模：地域の調整機構

（このWSを引き続き行うためには予算が必要なので、例えば、大学、薬剤師会、病院薬剤師会、行政、議員が一同に介して地域医療などに関してスモールグループディスカッションを行い、このWSの必要性を認識してもらう。）

項目2) 実習（教育）に対する理解

アクションプラン

- ① 大学、薬局、病院各組織でのFDを開催する。
- ② 大学、薬局、病院各組織のトップに実務実習の重要性を理解させる。
- ③ 地域ごとに研修会を開催する。
- ④ 実習終了報告会に各組織のトップに参加してもらう。

規模：地域 or 組織内

■ 改善項目と優先順位

C グループでは、6つの改善項目が挙げられ、以下にその優先度の高い順に議論した。

1) 実習指導に対する不安

コアカリに応じた受入スケジューリング遅れ

WS 修了者の指導薬剤師としての不安

WS 修了者の現場へのフィードバック不足

中小病院や診療所における実習内容不足への不安

2) 大学関係者の問題

基礎系と臨床系教員の取り組みならびに理解度に対する温度差

3) 意識の変化

WS 修了後、職場に戻った際のモチベーション低下

4) 連携の深まり

指導薬剤師同士（薬・薬）の連携は醸成されたが、その継続維持

5) WS 否定論者

WS のあり方に疑問を有する参加者の存在

6) その他

受入施設トップの理解不足

全ての受入施設薬剤師の実習教育に対する意欲不足

薬剤師の将来に向けての展望

受入施設以外の施設での6年制に対する理解不足

指導薬剤師の活動に関する一般社会における認知不足

■ アクションプラン

議論の結果、時間制約もあり上記優先度の一番高い1) について方策が立てられた。

1) 実習指導に対する不安

①コアカリに応じた受入スケジューリング遅れ

②WS 修了者の指導薬剤師としての不安

③WS 修了者の現場へのフィードバック不足

④中小病院や診療所における実習項目への不安

アクションプラン：スキルアッププログラムの展開が最重要課題と結論

①各職能提示モデル（1 1 W）の活用・応用

②コアカリの熟読

③フィードバック手法の提示

規模（主催）：各都道府県職能団体が主催したWS形式（SGD）により成果共有する。

1. 第三部での議論の前提

第一部「認定実務実習指導薬剤師が一施設に一人、全国1万人を超えました。さて、ワークショップによって変化したこと、変化しなかったことは？」において、変化しなかったことに対する改善項目やその改善策を検討することである。

2. ワークショップによって変化しなかったことに対する議論

(1) 変化しなかったこと（改善項目）と優先順位（優先順位の高い順に記載）

①WSの教育技法が活用できていない

原因

- ・教育技法の理解不足

②様々な面での連携不足がある

原因

- ・組織内および組織間のモチベーションの不足
- ・大学組織としてのモチベーションの低さ
- ・医療現場の意識の低さ
- ・大学でのモチベーションの低さ
- ・受け入れ側の意欲や認識の低さ

③WSの質の向上

④WSの広報システムが未発達（回数が不足している）

3. ワークショップによって変化しなかったこと（改善項目）に対する議論

(1) WSの教育技法が活用できていないことに対するアクションプラン

内容

- ①フォローアップが目的のインターネットフォーラム、伝達講習等を開催
- ②内容は、スケジュール作成に必要な内容、目標、方略、評価の再確認
- ③主催は、日本薬学会、日薬・日病薬、各県薬・各県病薬、大学
- ④規模：指導薬剤師と大学とで実施→成果をweb上で共有（誰でも閲覧可能）

(2) 組織内および組織間での連携不足に対するアクションプラン

内容

- ①情報のスムーズな伝達を各組織で確認する
- ②アドバンストWS報告書を公表し実行する
- ③各大学でのFD活動を実施し徹底する
- ④規模：各施設と主催団体で実施→成果を各媒体で共有

(3) WSの質の向上に対するアクションプラン

内容

- ①指導薬剤師の資質向上、実習の学生と大学、実習施設からの評価フィードバックから実習内容再構築(コアカリキュラムを含む)が目的のアドバンストWSを開催する
- ②内容は、実務実習で抽出された問題点について、KJ法を行ったり目標の見直しを図る
- ③主催は、大学人会議、中央調整機構
- ④規模：全国で実施→成果をweb上で公開

第一部「ワークショップで変化したこと、変化しなかったこと」で改善項目に挙げた下記の6項目（表1）について、優先順位を付けるべくディスカッションを行った。

表1 改善項目

- | |
|-------------------------|
| 1) 具体的な方略の実現方法が作成出来ていない |
| 2) 指導者の意識が維持できない |
| 3) 指導者の教育方法が変わらない |
| 4) WSの波及効果が受け入れ施設に広がらない |
| 5) 大学教員の意識のバラツキがある |
| 6) 連携が不十分である |

●ディスカッションのポイント

1) について、コアカリキュラムはかなり以前から公開されているが、実際の現場レベルでどのように具体的に指導したらいいのか分からない。もっと、具体的な資料や情報の整備が必要という意見が多かった。ただし、開局薬局の方では日薬や各都道府県の薬剤師会が中心となって、より具体的な指導内容や参考資料が整備されつつあり、病院薬剤師の方に出遅れ感が特に強いと思われるとの意見もあった。

4) について、5月から実務実習を控え、医師、看護師などの医療スタッフや患者さんの理解と協力が不可欠なのに、そのこと自体を知らない医療スタッフや患者さんが大勢いる。また、薬局内でも、実習担当じゃないからということであまり関心を示さない薬剤師が多いという意見が多かった。一方で、3)の問題点も含めて、実際に実習が始まると解決される問題でそれほど重要ではないという、現場の薬剤師の意見もあった。

この2点が重要課題ということになったが、どちらが最重要課題かについては、意見が割れたため、Ⅱ B グループとしては両方を最重要課題とした。

●アクションプラン

1) 「具体的な方略の実現方法が作成出来ていない」について

- ①実習のために具体的に活用できる情報が入手できたり、指導薬剤師同士の情報交換・共有に場が必要であると思われるため、認定実務実習指導薬剤師を対象としたアドバンストWSを地域または県単位で開催し、スケジュールアップする。
- ②実際の実習開始には3期に分かれるため、5月はまだ実習がない施設もある。そこで、エリア内で、既に実習が始まっている施設を訪問して情報を共有する。
- ③実習期間中に、その地域の学生、薬剤師、教員が一同に介して意見交換の場を設ける。

2) ワークショップの波及効果が受け入れ施設に広がらない

【薬剤師】に対しては

- ①指導薬剤師だけでなく、できるだけ多くの薬剤師に学生を担当をしてもらう。
- ②1施設に1人だけでなく、なるべく多くの薬剤師にワークショップに参加してもらい、理解と協力を得やすい体制を整備する。
- ③実務実習成功を目指した「討議 day」を提案する。

【他の医療従事者、国民】に対しては

- ①実務実習の意義について、会議での説明と協力の依頼を薬剤部長に提案してもらう。
- ②医師、歯科医師、看護師、薬剤師合同での全国規模のワークショップを開催する。
- ③ポスターを掲示するなど、国民への広報活動を全国規模で展開する。

1 概要

第一部にてKJ法により見出された「ワークショップで変わらなかったこと」について、改善項目と優先順位をあげ、問題点を論議し、改善に向けたアクションプランを作成した。

2 改善項目と優先順位の検討

2-1 議論の経緯

始めに、KJ法の島の名前をあげ、その意味するところを再確認した。

1) WS終了後の行動

WSでモチベーションが高まっても、現場に戻るとそれを維持するのが困難である。

2) 大学教員の考え方

教育にカリキュラムの考え方を取り入れていない。

医療薬学教育に参加しているという自覚が生まれていない。

3) 資格へのこだわり

認定実務実習指導薬剤師の認定をとることだけがWS参加の目的になっている。

4) 他人任せの行動

具体的な指導内容を自分で考えずに、できあいのマニュアルを求める。

5) WS開催システムの周知

WSがいつ行われるのか参加したいのに知らされていない、という不満が聞こえる。

6) 受講者と未受講者のモチベーションの差

未受講者のモチベーションを高めるように、受講者が働き掛けるべきである。

(受講者のモチベーションが高まっていない、という意味ではない)

次に、WS修了後の受講者の意識をどう高めるか、という観点から優先順位をつけた。その際、1)と4)は基本的に同じ問題であると考えられたため、1つの項目にまとめた。

2-2 プロダクト

改善項目と優先順位

1) WS終了後の行動の変化がない(モチベーションの維持が困難、他人任せの行動)

2) 受講者と未受講者のモチベーションの差

3) 大学教員の考え方(カリキュラムプランニング、医療薬学教育)

4) WSの開催システムが周知されていない

5) 資格へのこだわり

3 アクションプランの作成

3-1 議論の経緯

優先順位の上位3項目について改善策を検討した。次のような意見が提示された。

1) および2) について

- ・WSを一度受けただけでは不十分であり、受講後のフォローアップが重要である。
- ・フォローアップは、いわゆるシャワー型の学習伝達でもよい。
- ・タスクフォースを経験するとモチベーションが高まる。

- ・受講者自身がWSで変わるだけでなく、周りを変える必要がある。
- ・規模を限定せず、各組織の出来る範囲で研修会やWSを実施する。
- ・「共に学ぶ」研修会とする。薬学生を参加させると薬剤師の意識が大きく変わる。例えば病気をテーマにした寸劇を一緒にやってみる。
- ・薬局経営者や他の医療従事者も研修会・WSに参加させてはどうか。

3) について

- ・学生が教員を正しく評価することで、教員の意識を高める。
- ・試験が易しいというのではなく、カリキュラムの考え方に基づいて教育を行っているかを評価する。
- ・そのためには学生がカリキュラムを理解している必要がある。

以上の意見を検討しアクションプランを作成した。

3-2 プロダクト

アクションプラン

項目1) WS終了後の行動の変化がない(モチベーションの維持が困難)(他人任せの行動)

アクションプラン:

①何をするか: フォローアップ研修(学習伝達)、タスクフォースへの参加
アドバンスWSを開催、地区での小WSの開催

②内容は: 薬学生参加型、寸劇(糖尿病劇場)等、共に学ぶ研修会

③主催は; 地域薬剤師会、病院薬剤師会、大学

規模: 地域レベル、都道府県、大学周辺 → 各規模で共有

項目2) 受講者と未受講者のモチベーションの差

アクションプラン:

①何をするのか: WSの継続開催、薬剤師以外の人(薬局経営者等)も対象とする

②内容は: 現状、地区での小WSの開催

③主催は; 現状

項目3) 大学教員の考え方(カリキュラムプランニング、医療薬学教育)

アクションプラン:

①何をするのか: 学生による教員の評価

②内容は: カリキュラムの考え方に基づいた評価

③主催は; 大学

規模: 大学

全体討議において、1)の学生の参加に対し、学生が不安に思わないか(学生は、薬剤師が指導方法を未だ習得していないので研修をしている、と思うのではないか)、という質問が出たが、今までにも同様の試みがなされ、学生と薬剤師双方に好評である、との返答があった。

4 感想

SGDでは、KJ法でとりあげた項目以外にも実務実習やWSについて様々な問題点・考え方が次々と話題になり、時間はあっという間に過ぎて行った。時間を気にしてハラハラドキドキのタスクフォースではなく、話に熱中してワクワクドキドキの受講者として参加できたこと、たいへんに幸せであった。

参考資料5

「医療人教育改革においてワークショップ が果たす役割」

中島 宏昭

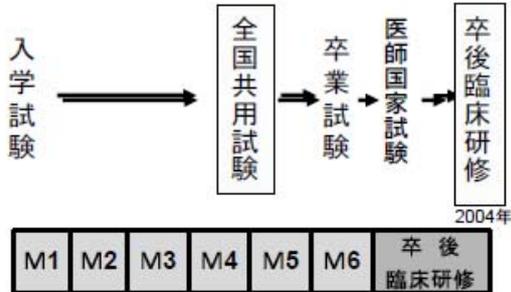
(昭和大学医学部教授・昭和大学横浜市北部病院呼吸器センター)

医療人教育改革において ワークショップが果たす役割

2010年1月24日
昭和大学横浜市北部病院
呼吸器センター
中島 宏昭

医学部でのワークショップの変遷

- 1974年 医学教育者のためのワークショップ
厚労省・文科省・日本医学教育学会主催
初め6泊7日、現在4泊5日、40人
富士教育研修所を会場→「富士研」
- 1995年 指導医養成講習会
医療研修推進財団主催 2泊3日(16時間以上)
卒後7年目以後の医師が受講して指導医資格
- 2004年 医師臨床研修制度スタート



なぜ卒後臨床研修が必修化されたか

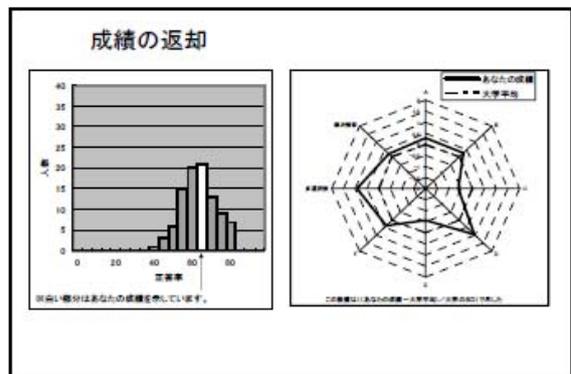
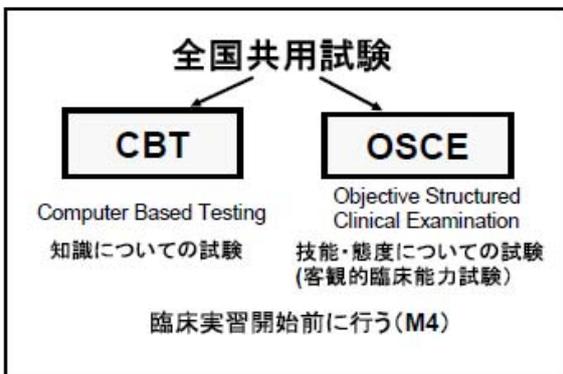
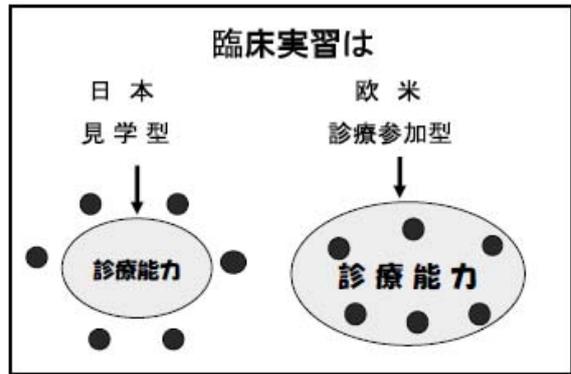
- 必修化前は医学部卒業生の70%以上が大学病院の専門科で研修
- 各科にまたがる基本的臨床能力の不足
- 人格的に問題のある医師がいるとマスコミが報道
- 卒後2年間の研修で人格を涵養し基本的臨床能力を身につけるために新制度がスタート(2004年)

なぜ卒業時に基本的臨床能力が 身につけていないのか

- 進級の評価: 知識の評価のみ
なぜ? ⇒ 国家試験の7割が想起レベルの問題
従って大講義室での講義が中心(知識の伝達)
技能・態度は評価の対象になっていない
- 臨床実習: 見学型
なぜ? ⇒ 医師法により学生は医療行為ができない
従って実習を参加型にできない

現在の国試は知識の評価に偏重

- 学習者は自分がどう評価されるかで学習態度を変える。
- 国試が知識のみを評価していて、技能と態度を評価していない。
- 従って学習者も教員も知識の伝達、獲得に全力をあげている。
技能と態度は評価されていない!





医学部教育の改革

- 1) 統合カリキュラムによる6年間一貫教育
- 2) モデルコアカリキュラム
- 3) 倫理教育(アーリーエクスポージャー)
- 4) PBLチュートリアル
- 5) 共用試験
- 6) クリニカル・クラークシップ

PBL、クリニカルクラークシップの効果

- 1) 自己学習能力の獲得
- 2) 問題解決能力の獲得
- 3) コミュニケーション能力の獲得

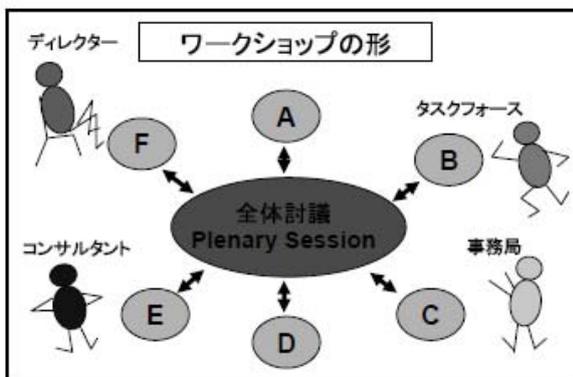
Teaching から Learning へ

知識偏重の教育から



技能と態度を重視した教育へ

教える人の養成 → ワークショップ

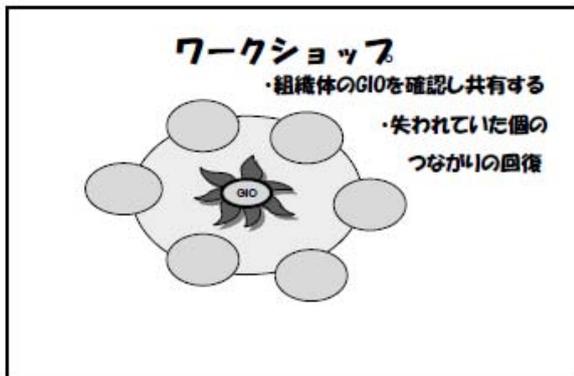
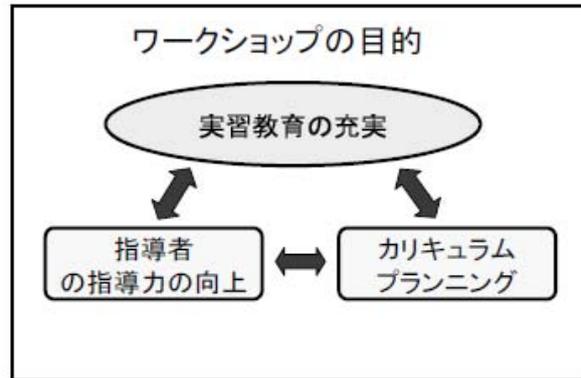
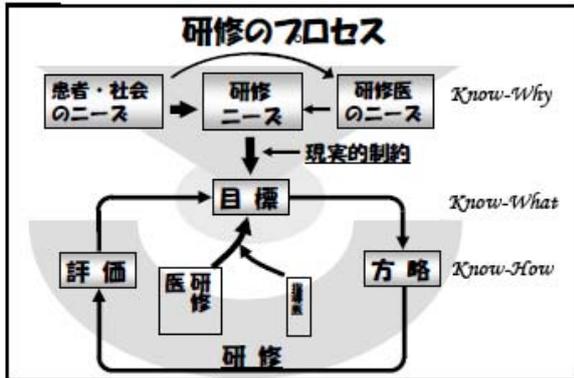
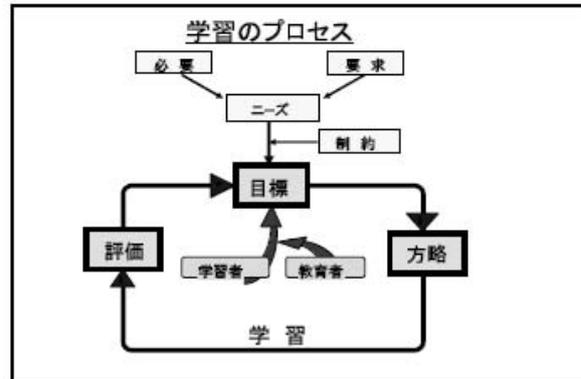
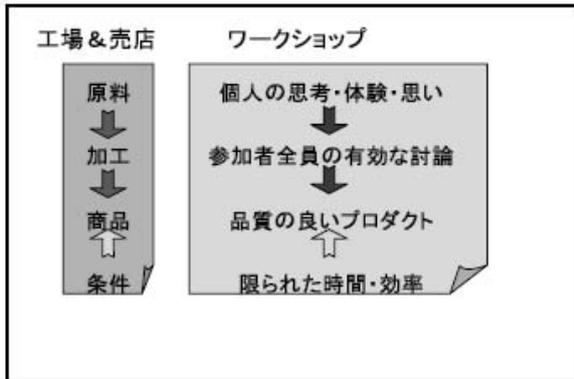


ワークショップ : 工房

「ワーク」 + 「ショップ」



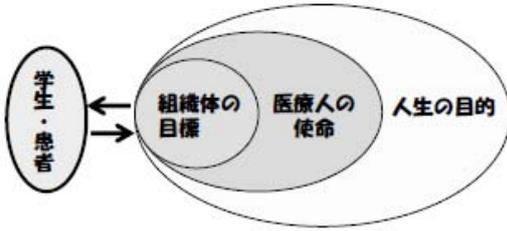
商品を作って売る
プロダクトをつくり、発表・利用する



ワークショップは人を育てる

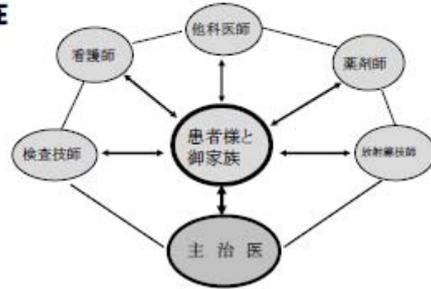
- ・システムは効率良く、人を育てるために有効
- ・しかしシステムは人を創らない
- ・人を人間として育てるのは人

私たちの思いが医療現場の雰囲気を作る

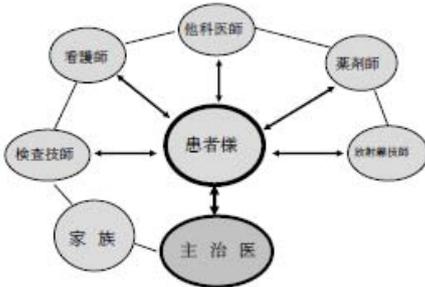


チーム医療→患者中心であるべき…

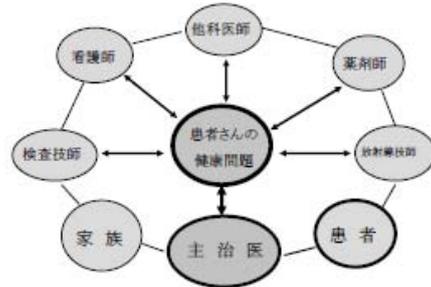
現在



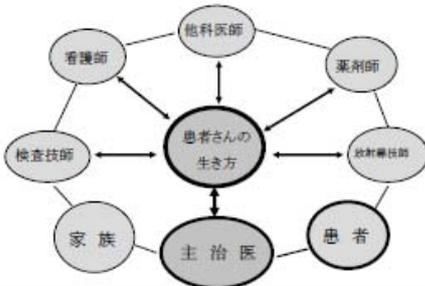
チーム医療のこれから



チーム医療のこれから



チーム医療のこれから



医学から薬学への期待

- 薬学が薬理学の研究、創薬、薬剤師の養成等により、如何に多くの患者さんを救ってきたかは臨床で働く者は実感として知っています。
- その薬学が6年制になって本格的に薬剤師を養成しようとしています。このことが日本の医療の質を格段に向上させることは確実です。今後医師法、薬剤師法が改正されて、薬剤師さんが活躍する領域がずっと拡大することでしょう。そうならなければなりません。
- 薬学6年制が日本の医療の質の向上のためのターニングポイントになると確信しています。